

第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 入賞作品集



令和元年 12 月 1 日 表彰式
於 國學院大學

國學院大學
高校生新聞社

学長 針 本 正 行

日本文化、伝統文化という言葉は、その国を代表する一般的なことがらというわけではなく、我々一人一人の生きている様式そのものではないでしょうか。皆さんの普段の暮らし、生活環境の極めて身近なところで何時とはなしに行われ、存続してきた祭や年中行事、その地域に根付いてきた働きかた、また広く民間信仰の具体的なありかたについて調査し、考察を加えて作成された多くのレポートには、我々日本人の精神と身体に刻み込まれている多様な生活様式が表現されています。その具体的な一つ一つこそが日本文化、伝統文化という大きな特徴を組み上げているわけでしょう。そういう意味では本コンテストのテーマは目立たない領域へ眼を向け、これを問い直すという気がつきにくい学びを意味しています。

しかし、我々の普段の生活の仕方の中にこそ我々の物の見方、心のあり方が染みこんでいるはずです。そしてそれらは常に意識的な行いとは限らない、何時、誰が始めたとは言えないようなことがらではありますが、これを長い年月にわたって継続してきたのはなぜなのか。そう問い続けていくことが日本文化の特質を徐々に浮き彫りにしていくことになります。この日本の国のいろいろな地域の多様な暮らしの中の一コマ一コマの調査研究が積み重なることで、日本文化という大きな生き物の姿が見えてくるのです。

どうか、このレポートを出発点として伝承文化の拡がりをお確かめ、その意義を現代社会へ発信し続けてください。

目 次

巻頭言	國學院大學 学長 針本 正行	
総評	國學院大學 教授 小川 直之	1
地域文化研究部門（団体）	最優秀賞	イチイからたどる「飛騨のなりたち」－飛騨の伝承文化に学ぶ－ 岐阜県立益田清風高等学校 地域研究 3
	優秀賞	知られざる深良用水の恩恵～深良用水の恩恵は深良（裾野市）だけではなかった。～ 静岡県立沼津城北高等学校 情報メディア部 用水班 4
	優秀賞	出雲の神話が語ること 東京都・香蘭女学校高等科 出雲研修 5
	佳作	幻の甚目寺飛行場 ～戦後 74 年目証言を聴く～ 愛知県立杏和高等学校 歴史研究グループ 6
	佳作	因幡の手笠踊りについて 鳥取県立八頭高等学校 因幡のカサ踊り研究会 7
地域文化研究部門（個人）	最優秀賞 折口信夫賞	民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響 鹿児島県立屋久島高等学校 中島 渚 8
	優秀賞	高田富士考 －新宿区のともしび 地域性を追いかけて－ 東京都・東洋高等学校 八木 つきの 9
	優秀賞	白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～ 岐阜県立益田清風高等学校 田口 真江 10
	佳作	地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～ 愛知県立杏和高等学校 熊沢 咲良 11
	佳作	集落の調査 －福岡県糸島市王丸集落－ 福岡県立修猷館高等学校 谷口 生貴斗 12
地域文化研究部門選評	國學院大學 教授 大石 泰夫	13
	国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹	16
地域民話研究部門（団体）	最優秀賞	こんなんあったけん調べてみた！！ －久谷地区・砥部町の伝承たち－ 愛媛県立東温高等学校 郷土芸能部 18
	優秀賞	『今昔物語集』巻三十第十の意識的欠字部分について ～舞台は古代下野国塩谷郡だった～ 栃木県立矢板東高等学校 リベラルアーツ同好会 19
	優秀賞	「謝文旦」は実在したのか～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～ 鹿児島県立鶴翔高等学校 地域文化研究同好会 20
	佳作	昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察 静岡県立韮山高等学校 課題研究班 21
	佳作	MINWA ～山梨の民話と民話でつながる世界～ 山梨県立甲府第一高等学校 探求 2 班 22

地域民話研究部門（個人）	最優秀賞	日本人と「桜」の伝説について 愛媛県・済美平成中等教育学校 砂野 光咲	23
	優 秀 賞	河童の甕 東京都立国際高等学校 井上 万結	24
	優 秀 賞	オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～ 千葉県・流通経済大学付属柏高等学校 坂入 茉緒	25
	佳 作	北条実時とウナギ井戸伝説 神奈川県・鎌倉女子大学高等部 田中 美衣	26
	佳 作	義経伝説と白旗神社 神奈川県・鎌倉女子大学高等部 中野 亜美	27
地域民話研究部門選評		國學院大學 教授 花部 英雄	28
学校活動部門選評		國學院大學 教授 高橋 大助	31
		國學院大學 准教授 飯倉 義之	31
第 15 回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト受賞者一覧			32
後記			33

第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト総評

國學院大學教授

小川 直之

自らの課題発見から始める一審査の要点

このコンテストの趣旨は入賞作品集に毎回記しているように、高校生が居住する地域あるいは通学する高等学校が所在する地域に継承されている「伝承文化」の中から、自らが興味・関心をもったり疑問に思ったりしたことを課題とし、その内容を実地に調べるか体験的に学び、その結果をレポートしてまとめる。このことによって地域文化の実態とその存在の意味を捉え、新たな発見をすることにあります。コンテストとしてその成果を評価するのは、優れた成果を顕彰することで、多くの高校生が地域の伝承文化から、いくつもの新たな発見ができるようになることを願うからです。

15回目を迎えるにあたって、今回は事前に「地域文化研究部門・地域民話研究部門の手引き－質の高い研究レポートづくりのために－」を作成し、配布をしました。この手引きでは、「課題を決めて『歩く・見る・聞く・考える・まとめる』の5ステップで進める」として、6項目を要点として説明をしました。いうまでもなく、この6項目が審査にあたっての重要点となります。その6項目は下記です。

1、課題を決める

課題が決まらなければ何もできませんので、まずは自分の体験や身の回りにあることの中から伝承文化と思われ、興味関心をもったことを列記することから始めましょう。1枚の紙に1テーマずつを書き、このことについて図書館の郷土資料コーナーにある図書で調べ、概略を書き加えます。インターネット上で検索して情報を集めることもできますが、ネット上の情報を活用するのはこの段階だけで、レポートづくりのための本調査は、自らが現場に行き、自分で情報を集めることが必要です。こうしていくつかの課題候補ができたら、その中から1つを選びます。

2、課題が決まったら下調べをする

図書館の郷土コーナーにある図書やネット上で調べたことは、課題の下調べにつながります。テーマ選択のために調べたことがらを、さらにもう一歩進めて調べるのが下調べです。

3、課題への取り組み手順を考える

課題の下調べではさまざまな情報収集が必要です。それは、課題について今までどのような研究が行われているのか、どのように説明されているのかを調べることから始め、これをもとに自分たちは何を、どのよ

うに調べるのかを決めなくてはなりません。調査計画を立てるということです。どのように調べるのかの計画立ては、一方ではどのようにまとめるのか、ということにもつながっています。まとめの方法を考え、レポートの仮目次を立てておく効果的です。

4、現地で調査を行う

このコンテストでもっとも大切なことは、課題について図書を丸写しにしたり、インターネット上の情報をコピー＆ペーストしたりすることです。このことは著作権を侵害することにもなりかねませんし、こうしてレポートをつくっても何も身につきません。こうした方法でレポートを作成しても、その内容はおそらくすぐに忘れてしまうと思います。応募された作品の審査は、一次審査と二次審査に分かれていて、図書やネット情報の丸写しだったり、情報の大半がこうした情報だったりするレポートは、第一次審査でふるい落とししています。

もっとも重要なことは、課題の現場に行って自ら情報収集を行い、これをもとに伝承文化を考え、意見をまとめているかどうかです。このことが「歩く・見る・聞く・考える・まとめる」の重要点といえます。何ごとも自分の目や耳、心、さらには感触などによって、等身大に捉えていくことが大切です。それを補うのが外部情報です。

課題についての調査方法は、課題の内容によって異なります。祭りや芸能を見学し、写真に撮るとか、当事者にインタビューするとか、地図などの図を作成するとか、いろいろな方法があります。どのような方法をとるのかは、3であげた段階でおおよそ決めておき、現場での調査の際に必要なに応じて修正すればいいのです。

5、調査結果からレポートの目次をたてる

調べた情報をもとに、改めて何をどのように伝えるのか検討をします。レポートで「何を言いたいのか」を明確にすることが大事なことです。あれもこれもではなく、課題について深掘りし、このことがレポートを読む者に伝わるようにすることです。

6、レポートの原稿を書く

目次を立てたときに決めた「何を言いたいのか」が分かるように、原稿を作成します。重要なことは根拠をもった意見ということです。なぜ、そう考えられるのか、そう言えるのか、第三者が納得できなければなりません。そして、肝要なのはわかりやすいかどうか

です。レポートを別の人に読んでもらって意見を聞いて修正して仕上げるのも効果的です。レポートは書けばいい、というものではありません。

第15回コンテストの応募と授賞状況

このコンテストは國學院大學と高校生新聞社が主催し、農林水産省・文部科学省・全国高等学校長協会などの後援によって実施されています。今回は地域文化研究部門、地域民話研究部門、学校活動部門の3部門で、合計61校から609作品の応募がありました。7月1日から公募を始め、9月10日に締め切りました。

地域文化研究というのは、たとえば祭りや伝統行事、郷土料理、地域で伝えている「しきたり」や「習わし」など、民俗学が研究対象としている分野です。地域民話研究というのは、地域に伝わっている昔話、伝説などです。ここで重要なことは「地域の」つまり、特定の場所ということです。日本全体とか、どこの伝承文化なのか特定できないものは対象にできません。

学校活動部門というのは、伝承文化の学習に対する学校や学内の部活など組織的な取り組みで、この取り組みによって教科学習とは違う新たな発見があり、それによって生徒たちの視点や学習への取り組みにどのような効果があったのか、このことをまとめたレポートが対象となります。部活でこんなことを調べ、その結果はこうであったというわけではありません。学校や先生方にとっては、教科教育とは異なる成果がどのように上がったのかということになります。第15回コンテストでは、学校活動部門に9作品の応募があり、この中には地域の文化研究としては優れたものがいくつかありましたが、研究成果だけに留まっていたため、優秀学校賞の授賞には至りませんでした。生徒たちが、活動によって自分たちの視点や興味関心、学習への取り組みがどのように変わったのかを自覚し、レポートにするのは難しいかもしれませんので、先生方のアドバイスが必要になると思います。

地域文化研究部門は個人の部が346作品、団体の部が49作品、地域民話研究部門は個人の部が129作品、団体の部が76作品でした。全体の応募数は、昨年度の第14回は728作品でしたので120ほど減っていますが、応募作品の質は昨年より高くなっているといえます。課題について表面を撫でただけの薄いものではなく、内容が詳細、緻密なものが多くあったということです。作品を読んでいくと、課題を明確にして深掘りしようという意欲が感じられるものが多くありました。

入選以上の授賞作品の一覧を見ればわかるように、地域文化、地域民話とも標題に特定の場所や地域があげられています。第16回コンテストに応募しようとする方は、この作品集から先にあげた6項目がどのよう

第1回から15回までの応募状況

回	年 度	応募件数	応募校数
第1回	平成17年	133件	33校
第2回	平成18年	244件	30校
第3回	平成19年	85件	38校
第4回	平成20年	153件	38校
第5回	平成21年	417件	36校
第6回	平成22年	474件	41校
第7回	平成23年	318件	45校
第8回	平成24年	650件	36校
第9回	平成25年	538件	35校
第10回	平成26年	620件	45校
第11回	平成27年	640件	47校
第12回	平成28年	628件	57校
第13回	平成29年	709件	57校
第14回	平成30年	728件	62校
第15回	平成31年	609件	61校

に実現されたのか、そのいくつかでも読み取って参考にしてください。

今回はすべての部門に最優秀賞を出すことができました。過去においては、一定のレベルに達していない場合は、最優秀賞を授与しないこともありました。それは審査ではレポートの質を重視しているからです。今後の研究活動のモデルとなる作品を集積していくことが肝要だと考えています。地域の伝承文化を対象とするコンテストは、全国的にも國學院大學だけが行う特色ある取り組みですが、審査は質を重視していますので、今回の受賞者の方々は自信をもって、さらにこうした活動を深めてください。

コンテストでは最優秀賞の作品のなかから、1作品を選んで折口信夫賞を授賞しています。それは國學院大學における伝承文化についての研究と教育の礎を築いたのが折口信夫（歌人としては釈道空）だからです。今回は鹿児島県立屋久島高等学校の中島 渚さんの「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」を折口信夫賞に選びました。このレポートは屋久島に現存する生活用具である「民具」についての研究をもとに、地域の方々に集まってもらってこれらの民具について語りあうという、所謂「回想法」の実践を行い、参加者からこの実践についての感想をモニターしてまとめたものです。研究だけでなくさらに詳細な内容が必要でしたが、回想法を取り入れ、結果をモニターしてまとめているのが独創的でした。

以上、2項目にわけて総評を記しましたが、この作品集を参考にしながら第16回コンテストでは、さらに質の高い優れた作品の応募をお待ちしています。

イチイからたどる「飛騨のなりたち」 —飛騨の伝承文化に学ぶ—

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

（岡崎愛音、熊崎萌恵、熊澤流維、黒木翔太、酒巻友、佐久間葵、中島柚葉、野中ひかり、二村優真、細江康太、松井夕乃、山内彩未、脇坂美帆、渡邊亮介、阿部凌治、伊藤輝、今井歩、今井颯太、熊崎瑠伊、杉山ころこ、谷本千春、中島朱佑、野中沙莉那、林杏南、林茉由華、安江里奈）

応募の動機

私たちの学校の敷地にはイチイという木が並んでいる。「地域研究」の授業で、昔この木で作った笏を天皇に献上したとき正一位の位を授かったという伝承があり、イチイには「一位」という意味や歴史があることを学んでとても驚いた。そこで、飛騨の伝承や現在に残る文化の研究を通じて、未知の「飛騨のなりたち」を研究しようと思った。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「飛騨のなりたち」を研究するにあたり、「飛騨と中央の関係がどのようなであったか」という視点で文献調査を行い、次の5つのテーマに分かれて現地調査を実施した。

① 「両面宿儺」の伝説

『日本書紀』には、「両面宿儺」という一つの体に二つの顔と各4本の手足に弓矢をもつ飛騨の怪人が、朝廷軍に討伐されたという記述がある。一方、地元の伝承では宿儺は斧を持って出現したとされ、宿儺の開創と伝わる寺院もある。斧には木を切り開き、国を拓くという意味が込められていると考えられ、良き指導者としての伝承が残っている。

② 飛騨の馬と紙絵馬

飛騨という字には「馬」が入っている。これは飛騨がかつて良馬の産地であったことに由来し、天皇に神馬を献上した伝承などが残っている。現在では、家庭や商店の玄関に紙絵馬という馬の絵が描かれた大きな紙を飾る文化があり、飛騨と馬のつながりが残っていることがうかがえる。

③ 飛騨工

奈良時代の飛騨国は、一部の税が免除される代わりに、毎年多くの男性が木工として都に徴発され労働に従事した。飛騨工とよばれた人々のすぐれた木工技術は『今昔物語集』に語り継がれている。飛騨工が実際に歩いて都に向かった東山道飛騨支路は、現在も石畳の残っている箇所があり、当時の飛騨工の苦労を垣間見ることができる。

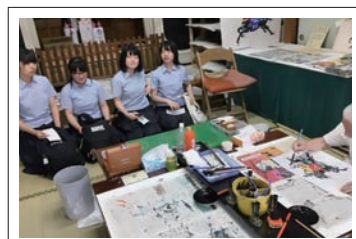
④ イチイと一位一刀彫

笏木献上の古例は、現在も天皇陛下即位の際に飛騨一宮水無神社からイチイの笏木を上納する慣例として残っている。また、飛騨では江戸時代に一位一刀彫という伝統工芸が成立した。イチイの素材を自然のままに彫った木工品は、色を使わず木目の美しさを活かしており、寒い土地に育つイチイの素材ならではの特徴がそれを可能にしている。

⑤ 飛騨河合と山中和紙

中世の皇室や将軍には、飛騨国から和紙が献上されていた。飛騨で作られる丈夫で上質な和紙を、地域外の人には飛騨紙とよび、地元の人は山中和紙とよんだ。飛騨市河合町は町全体が豪雪地帯の険しい山地で農業に適さなかった。そのため、この気候や地形を利用して作られるのが山中和紙であり、現在まで受け継がれている。

以上の調査を進める中で、5つのテーマに共通する背景として、飛騨は山に囲まれた森林の多い雪国であるという地形的・気候的な特徴のつながりを見つめることができた。この環境の中で生まれた人々の暮らしや文化こそが「飛騨のなりたち」であると考えられる。さらに、それぞれに共通する課題として、伝承文化を継承する担い手が減少しているという現状があった。今まで消えることなく受け継いできた文化を、私たちの手で次に残していきたい。



山桜神社で紙絵馬製作の様子を見学



一位一刀彫工芸士の津田さんにお話を聞く

知られざる深良用水の恩恵

～深良用水の恩恵は深良(裾野市)だけではなかった。～

静岡県立沼津城北高等学校
情報メディア部 用水班
(小塚岳飛、柿島蒼良)

応募の動機

水に恵まれず田畑が増やせなかった深良村（現静岡県裾野市）に、満々と水を湛えた芦ノ湖から箱根の外輪山に隧道を掘り、深良村に水を引き、田畑を増加させた深良用水に興味を持ち研究を始めました。その研究の結果、深良用水の恩恵を受けている地域は深良だけではなかったのも、そのことを多くの人達に知ってもらいたいと思い応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 はじめに(テーマ設定理由) | 2 深良用水のアンケート実施 |
| 3 深良用水特別展示 | 4 深良用水の調査 |
| 5 まとめ(結論) | 6 参考文献 |
| 7 深良用水関係年表 | |

今回の研究では次のことがわかりました。

「深良用水」の水が流れているのは、現在の裾野市だけではなく、御殿場市・駿東郡長泉町・駿東郡清水町であることがわかり、そして「深良用水」の末端は、竹原村・伏見村・新宿村（現在の駿東郡長泉町竹原・駿東郡清水町新宿・駿東郡清水町伏見）であることがわかりました。

井組三郷、井組29ヶ村（最初は30ヶ村）の存在もわかりました。上郷（深良村・岩波村・神山村・上ヶ田村・金沢村・葛山村・御宿村・千福村・定輪寺村・富沢村・一色村、11ヶ村）、中郷（石脇村・佐野村・二ツ屋新田・久根村・公文名村・稲荷新田・茶畑村・平松新田・麦塚村、9ヶ村）、下郷（伊豆島田村・水窪村・納米里村・上土狩村・中土狩村・下土狩村・竹原村・本宿村・伏見村・新宿村、10ヶ村）合計30ヶ村。（1707（宝永4）年本宿村が脱退し、それ以後近世を通じて29ヶ村で存続します。）

また、「深良用水」は、箱根の外輪山にトンネルを掘って、外輪山の内側にあつて豊富な水を湛えている芦ノ湖の水を西側の山麓へ出し、それをいったん黄瀬川に流し込み、その黄瀬川の各所に水を取り入れるための堰を設けて灌漑用水を引水するものです。したがって、単に河川の上流部に堰を設定し、そこから導水のための水路を平野部に向けて作るだけの工事ではなく、第一に外輪山に長いトンネルを掘り抜くこと、第二に黄瀬川への合流によって再度堰から引水して分配することの二点において大きな特色をもち、当時としては画期的な大土木事業であることもわかりました。

さらに、「深良用水」の恩恵を受けている地域は、現在の裾野市だけではなく、現在の御殿場市、長泉町、清水町であることがわかりました。

その中で、特に下郷に属していた地域が「深良用水」の恩恵が大きいことがわかりました。調査した資料によれば、村数では上郷が最も多いのですが、水掛け面積では下郷の方がはるかに多く、深良用水掛りの半分は下郷の地域（伊豆嶋田・納米里・水窪・上土狩・中土狩・下土狩・竹原・伏見・新宿）ということになります。ようするに、「深良用水」の恩恵を最も受けているのは下郷地区ということが出来ます。下郷のための「深良用水」と言ってもいいと思います。

「深良用水」という名称なので、深良村、現在の裾野市深良のイメージが強く、他の地域はほとんど知られていないのですが、その恩恵を最も受けているのは下郷地区（伊豆嶋田・納米里・水窪・上土狩・中土狩・下土狩・竹原・伏見・新宿）だったのです。

用水の確保については、上郷・中郷・下郷で同じではなく、特に黄瀬川に設定された深良用水掛の堰としては最下流に位置する大堰にたよっている下郷は水確保のために大変な努力をしなければならませんでした。それが江戸時代を通じて何回となく繰り返された水論として現象しました。いずれも下郷が上郷を訴える形ではじまっており、下郷のおかれた状況をよく示しています。

下郷、特にその中でも用水掛りの下流部を形成する五ヶ村（中土狩、下土狩、竹原、伏見、新宿）は、その水論の成果として残された判決文（裁許状）を大切にしていたのです。今日まで絶えることなく続けられてきた、いわゆるゴサイキョ（御裁許）と呼ばれる裁許状その他の共有文書の虫干しにはそのことがよくあらわれています。1年に1回（2019（令和元）年は8月18日に竹原区が当番で開催されました）、各村の役職者立会いのもとで虫干しをした後、帳箱に文書を取り、厳重に封印をして、保管するのです。それは下郷が団結して闘い、獲得してきた成果を再確認する場であり、その再確認を通して連携を強めようとするもので、単なる虫干しではないことは明らかです。

このようなことから、下郷五ヶ村（中土狩、下土狩、竹原、伏見、新宿）が「深良用水」の恩恵を強く感謝していたことがわかり、また「深良用水」の恩恵を忘れないで、後世に伝えたいという思いが強く感じられます。

しかし、現在、下郷地域に住む人たちが「深良用水」の恩恵をどれだけ知っているのでしょうか。ほとんどの人が知らないと思います。今後、私たちは、現在の下郷地域の人たち、さらには全国の多くの人たちにこのことを知ってもらいたいので、「深良用水」に関する研究発表をする機会を作って、全国に発信していきたいと考えています。



芦ノ湖水神社
毎年8月1日に祭典が開催される



深良用水
下郷地域を灌漑している大堰

出雲の神話が語ること

東京・香蘭女学校高等科

出雲研修

（伊倉葉月、石坂莉沙、風間友紀、木村瑛香、響田美紀、小面柚茉、佐藤美季、新保友菜、谷口舞優、國保理央、光造由梨、安田佳那子、植本文菜、葛西美嘉、佐野生莉、渋谷佳乃、曾山ももこ、當間朱莉、湯本葉留）

応募の動機

選択授業等で『古事記』の神話について学ぶうちに、多く疑問点を持つようになりました。神話は創作なのか事実なのか、また何か意図があって語られているのか、そこで実際に神話の舞台となった出雲を訪れて現地で学ぶことで新しい発見ができるのではないかと考え、研修を行い、その成果をレポートにまとめ、応募しました。

研究レポート内容紹介

『古事記』『日本書紀』『風土記』などの神話を読み進めていくうちに、記紀神話の共通点・相違点、出雲と大和との関係などが見えてきました。また、神話が物事の始まりを語るものであることもわかりました。例えば、出雲神話では「和歌」の始まりが語られていたり、多くの地名譚も出てきました。地名譚の要素を持つ『風土記』の「国引き詞章」からは、古代出雲の中心地や支配領域がわかり、三瓶山から美保まで島根半島の両端を訪れるフィールドワークを行うことにしました。

そしてそれは、期せずして、明治時代に出雲で過ごしたラフカディオ・ハーンの足跡をたどる旅ともなりました。ギリシャで生まれたラフカディオ・ハーンは帰化し、小泉八雲と名乗りました。近代化する前の日本を愛していた彼は、日本人の妻から神話をたくさん聞かせてもらうなどして日本文化への関心をさらに持ち、出雲や隠岐を旅しました。

神話とフィールドワークが結びついた結果、加賀の潜戸では、美しい景観が神話を造らせてしまうこともあると感じるなど、いろいろな発見がありました。出雲の中心はかつて意宇にあり、国府や神魂神社の付近に国造家もありました。熊野大社もあり、現在も出雲大社の御食のために火を提供する鑽火祭が行われています。また、神在月とは、もともと竜蛇様が海から来ることに由来していたことと、その信仰の中心は佐太神社にあったのではないかとということもわかってきました。今でこそ、出雲大社が出雲の中心となっているけれど、過去には熊野や佐太の神様の存在が大きかったことがわかります。

荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡、西谷墳丘墓など弥生の遺跡が多くあり、さらに出雲大社の直近にある命主社から出土した勾玉もまた、弥生またはそれ以前の古層の信仰を想起させ、ヤマト政権成立以前からの王権の存在が確認できました。それだけの王権だからこそ、ヤマト政権は、出雲王権に国譲りをさせる必要がありました。

王権は国譲りを行いながらも、宗教的権威は保ち、その中心地を遷し、今の出雲大社と祭祀が形成されていきました。出雲大社にも神仏習合の時代があったことや、戦後に入ってから祭りの在り方などが変化していることもわかりました。

今後の課題

私たちが今見ている出雲は、昔からずっと変わらず存在するものではなく、時代によって少しずつ姿を変えながら今に至っていました。その変遷を、時代時代の切り口を探して、もう少し調べていきたいと思います。また、出雲と大和の関係にも迫り、なぜ神話が語られてきたかという意味もまだ探していきたいです。



出雲大社瑞垣の内を権宮司千家和比古氏によりご案内いただく



小泉八雲旧居にてハーンの曾孫である小泉凡氏のお話を伺う

幻の甚目寺飛行場

～戦後74年目 証言を聴く～

愛知県立杏和高等学校
歴史研究グループ
（橋本隆良、瀧波愛翔）

応募の動機

戦争が終わって74年が経ち地元の戦争について調べていたところ自分の住んでいる近くに甚目寺飛行場というものが存在していたことが分かりました。こんなところに飛行場があったことなんて自分たちはもちろん知りません。また、飛行場があった近くに現在住んでいる人さえその存在を知らないことが多いです。調べていくうちに地域の戦争の記録として残していきたいと思って応募しました。

研究レポート内容紹介

1、資料集め

まずインターネットで甚目寺飛行場のことについて調べました。その後、唯一残っている文献を手に入れ概要を把握することができました。また、新聞記事からも資料を集めました。突然、軍の命令で当時育てていた麦を全部刈り取り整地して飛行場ができたことがわかりました。

2、実際に飛行場後に行ってみる

友人と夏休みを利用して実際に飛行場跡に行きました。行く前に航空写真から確認はしていたが行ってみると想像以上に広く現在よりも重機や技術が発達していなかった時代にほとんど人の手でつくられたと思うと想像ができませんでした。唯一残っている作戦司令室跡にも行きました。四角い穴があり中に入ってみようとしたのですが草やゴミで奥までは行けませんでした。

3、当時中学生の方から聞き取り

実際に当時中学生で飛行場建設に携わった方4人から2時間半にもわたって話を聞くことができました。当時は食料に飢えていたり外で逃げ遅れればアメリカ軍の飛行機から銃撃を受けたりと生きるのに必死だったそうです。そんな苦しい生活を送っているにも関わらず当時中学生の方たちの一番の思い出は「食事当番」でした。強制重労働がなくたまに当時では貴重な豚肉などをもらえる食事当番が楽しかったそうです。人間にとって食べることは大切なことなんだと改めて教えられました。玉音放送や当時使われていた教科書、本物の銃弾を見せてもらいました。自分たちにとってすべてが初めての経験でした。実際に銃弾を手に取りさせてもらいました。持ってみると想像以上に重くずっしりきました。こんなものが当たったら本当に即死するんだと思いました。話を聞いているうちに命の大切さを学ぶことができました。生きたくても生きることができなかった当時の人たちのためにも命を大切にしないといけなかったと思いました。



甚目寺飛行場司令塔跡



聞き取りの様子

今後の課題

今回調査することができなかった戦場に行った人の聞き取り、当時麦を育てていた人の思い、戦後どうやって農地に戻されたかの証言を聞き記録として文章に残すことです。戦争が終わるまでの約10か月だけ存在した幻とも言われる甚目寺飛行場、唯一残っている作戦司令室跡があること、戦争の記憶を風化しないためにもこれからも調査を進めていきたいと思っています。

因幡の手笠踊りについて

鳥取県立八頭高等学校
因幡のカサ踊り研究会
(村田海人、前場百合菜、細川由希子)

応募の動機

岩美郡宇部野村美敷地区（現鳥取市国府町美敷周辺）には雨乞い踊りに由来する「因幡の手笠踊り」（笠は被り笠のこと）が伝えられており、明治の終わりに「因幡の傘踊り」（長柄の傘を使用）に発展したともいわれる。しかし、大正初期に行われた美敷水源地の堰堤工事の中で、山形県から伝えられた「花笠踊り」がもとになったという伝承もある。この「花笠踊り」起源説について検討してみた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

大正7年(1918)9月、台風の際に美敷水源地の土堰堤が決壊し、死者8名を出す惨事となった。大正8年(1919)から大正11年(1922)に行われた美敷水源地の復旧工事で、山形から来た人物（詳細は不明）から美敷在住の宇田川米蔵氏が花笠踊りを習い、美敷で手笠踊りが始められたという（以下「因幡の手笠踊り」とする）。戦前から美敷青年団の「因幡の手笠踊り」は有名で、昭和22年(1947)、昭和天皇の山陰行幸において、天覧も行われた。しかし、昭和35(1960)ごろには兼業農家が急増し、踊りを行う集落は減少していった。現在は神垣手笠踊り保存会、神馬手笠踊り保存会、宮下地区手笠踊り保存会などいくつかの保存会が踊りを継承している。

動画をもとに踊りの所作を分析すると頭の上で水平に笠を前後する、二人組の踊り手が入れ替わる（「切り合い」という）、体の真正面で上下に笠を動かす動作、見得を切る動作などが共通する。特に踊りが「切り合い」に入るとホイッスルを鳴らすなど「因幡の傘踊り」と共通点が多く、強い影響が感じられる。また、踊り唄は「鴨緑江節」「浪花節」など大正時代に流行したもので、「因幡の傘踊り」で使用されるものと完全に一致していた。「因幡の手笠踊り」固有の踊り唄は確認できなかった。

なお、山形県の「花笠踊り」は大正8年(1919)～大正10年(1921)の村山郡尾花沢市の貯水池徳良湖の築堤工事の最中に、菅笠を使った笠踊りとして踊られたのが始まりであり、紅花造花を使った「花笠踊り」は大正11年(1922)の工事完成祝いのパレードで完成した。「花笠踊り」が成立した時期は美敷水源地の工事とほぼ同時期である。「花笠踊り」についてはインターネット上の動画で所作を確認したが、「笠回し」（笠を体の前で回転させる動作）などは「因幡の手笠踊り」と共通している。

以上の調査結果から「因幡の手笠踊り」は山形の「花笠踊り」の刺激を受けて成立したと考えられる。さらに、「因幡の手笠踊り」は先行する「因幡の傘踊り」（明治32年成立）の影響を受けて現在の踊りになったのではなかろうか。なお、「因幡の手笠踊り」が大正時代初期（大正8年～11年）に成立したならば、明治時代末期に成立している因幡の傘踊りの原形にはならない。よって、「因幡の手笠踊り」および「因幡の傘踊り」が雨乞い踊りに由来するという説はなりたたない。

踊り唄や踊りの所作から考えて、美敷水源地の堰堤工事より以前に「因幡の手笠踊り」が存在していたとは考えられず、山形県から伝わったという説は有力と思われる。現在の踊りはホイッスルの使用や踊り唄など「因幡の傘踊り」の影響を強く受けている。

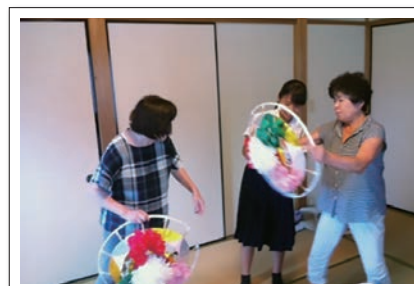
大正時代初期に多くの青年団が「因幡の手笠踊り」「因幡の傘踊り」を開始し盆踊り改良に取り組んでいる。その原因は何か調査してみたい。



宮ノ下地区手笠踊り保存会
(2019.8.24 因幡万葉歴史館)



神垣手笠踊り保存会の皆さん
(2019.9.8 鳥取市国府町神垣公民館にて)



手笠踊りの指導
(2019.9.8 鳥取市国府町神垣公民館にて)

民具を活用したレクリエーションが 参加者に与える影響

鹿児島県立屋久島高等学校 3年
中 島 渚

応募の動機

2年生の環境コースの研修で屋久島町歴史民俗資料館を訪問した際に民具と出会い興味を持った。屋久島の民具調査が行われた30年後の現状を調査し、その結果から消えゆく民具の活用方法の一つであるレクリエーションを実施し参加者に与える影響を調査した。その調査結果をより多くの人に伝えたいと考え応募した。

研究レポート内容紹介

研究1 民具に関するアンケート調査

民具の認知度、使用、保管、廃棄状況について高校生134人、大人56人を対象に調査した。その結果、高校生が見たことある民具で多かったのは、餅つき体験やイベントで見たイシウス・キネ、センバで、大人が現在も使用しているのは、タケボーキ、ナタ、クシ、ソケなどだった。しかし、ゴブランブ、クラ、ヒラギワイ、モミトオシなど多くの民具が使われなくなっており、民具は古くなった、置き場所がない、使い道がないなどの理由や使用者の死亡、家の改築をきっかけに廃棄される実態があった。この状況が続けば、民具は生活から消え昔の暮らしを知る貴重な財産がなくなる可能性がある。そのため、消えつつある民具を保存し、新たな活用方法を探ることが重要である。この結果を受け、研究2を実施した。

研究2 民具を使ったレクリエーション

民具がレクリエーションの参加者に与える影響を探るために高齢者30人、高校生9人、施設職員5人を対象に民具を活用したレクリエーションを1時間行った。運営に携わる人とは事前に打ち合わせを行った。内容はスライドに民具を投影し、使用の有無を○・×カードで提示してもらったり、箱の中にある民具の名称を触った感覚だけで当ててもらったりするクイズを行った。またグループ活動で思い出のある民具について写真をもとに高校生に語ってもらい、最後にアンケート調査を行った。

レクリエーションの効果として、高齢者にとっては、若い世代との交流の場となり気分の高揚から記憶が再生され、笑顔や口数が増加し、昔の暮らしを教えたいという気持ちを高めた。高校生にとっては、高齢者世代との交流の場となり、民具を活用した良い効果を実感し、昔を知る満足感につながった。施設職員にとっては、昔を学ぶ場となり、日ごろ支援する高齢者を理解するきっかけとなった。民具が高齢者に与える効果を実感し有効な支援の一つとして認識したことがあげられた。今回の研究では、使われなくなった民具の活用法として回想法を取り入れたレクリエーションを実施した。その結果、参加した高齢者だけでなく、高校生、施設職員などの第三者にも良い効果が見られた。



民具を活用したレクリエーションの様子



レクリエーション後のアンケート調査

今後の課題

今後の課題としては、レクリエーションで使用する民具の種類を増やしたり、参加者の居住区域を広げたりして効果を検討してみたい。また、民具の新たな活用方法を探り、今後レクリエーションで活用するための民具を収集し保存するための有効な方法も検討していきたい。

応募の動機

民俗学の魅力に惹かれ、大学ではそれらを学んでいきたいと漠然と考えていた時、民俗学を専門にされている国語科の先生に出会った。先生から研究の話をたくさんお聞きするうちに、次第に私自身も研究を行ってみたいと思うようになった。そこで、東京都新宿区で生まれ育った私だからこそ見い出せる都市の伝承を調べていくことにした。

研究レポート内容紹介

古くから、畏怖されたり崇められたりする存在として日本人の生活に根付いていた富士山は、江戸時代になると「富士講」という形で現れる。富士講が組織された背景には、相次ぐ災害や飢饉による生活必需品の物価高騰に苦しむ庶民の姿があった。後に富士講は、「江戸八〇八講」と呼ばれるほど盛んになるが、時代を経るとともに富士講の伝承は極めて困難な状況になっていった。そのような状況であっても、新宿区西早稲田では地域との繋がりを活かすことで、現在も活動を続けている「丸藤宮元講社」の灯りがともしり続けている。

聞き書き調査で地域と富士講・富士塚の繋がりを追跡していくなかで、地域による認識の格差を実感した。同じ新宿区に住んでいるにも関わらず、富士講や高田富士について全く知る機会がなかったのだ。富士祭りでは、自分よりはるかに小さな子供たちでも、山開きの日だけ富士塚が開くことを知っていて、「富士塚に登りに行こう」「鐘を鳴らしに行こう」といった言葉が飛び交っていることに大変驚いた。区内であっても、これほどまでに認識に違いがあるのは、高いビルが立ち並ぶ景色の中で、伝承されている物の存在を気にする機会が減多にないことや、地域ごとの活動は盛んだが、地域間の交流があまりみられない新宿区の特徴にあるように思える。

そして聞き書き調査で最も実感させられたことは、聞き書き調査に協力して下さった丸藤宮元講社の先達である井田三郎さんは、富士講の研究を通して出会い、一人では辿りつけなかった高田富士に導いて下さった私にとっての先達である、ということだ。またその先達としての姿は、「丸藤宮元講社の先達は自身が最後になるかもしれない」と考えているからこそ、最後まで富士講の伝承を途絶えさせないように出来る限りのことを続けていこうとする、強い覚悟を感じるものだった。こうした姿こそが、東京・新宿において、富士講の伝承を残すことができた理由の一つだと考えられる。



山開きの日には富士塚に登れる。入り口から奥へ丸藤宮元講社の講印の書かれた提灯が続く。



富士塚の山頂へ続く登山道。決して楽な道のりではなく険しい勾配が続き、まるで富士登山をしているかのように思わせる。

今後の課題

富士講の多くが姿を消しつつあり、それは食行身禄の弟子である高田藤四郎より続く丸藤宮元講社も例外ではない。現在の生活の中に、改めて富士信仰を定着させることは難しいが、富士講の歴史を知識として伝承することはできるはずだ。災厄や困難な世情を人々が知恵や工夫をこらして乗り越えてきたことを学ぶことは、先が見通せない現代で問題に直面した時に、これらの伝承が手助けになって人生を豊かにすることに繋がるはずだ。そのために私が出来ることは、富士講や富士塚とそれに興味を持つ人々の間を繋ぐ「仲介者」になることだと考えている。

白雲座の地歌舞伎

～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～

岐阜県立益田清風高等学校 2年

田 口 真 江

応募の動機

私は、地域や家族の影響により、小学生の時から地元の舞台「白雲座」の地歌舞伎に携わってきました。先生の勧めもあり、白雲座歌舞伎の歴史や保存会の取り組みを深く知るため、史料調査や、関係者への聞き取り調査を行うことを考えました。また、これまでに出演してきた演目（芸題）の内容や自分の役柄を再確認するため、このレポートを作成しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

江戸時代に建設された白雲座が、現在の劇場型舞台に改修されたのは、明治23年（1889）2月のことで、同年3月27日には興業が行われたことが記録されています。明治から大正時代には県内の他地域と同じように地歌舞伎が大流行しましたが、昭和に入ると下火になり、建物は地歌舞伎舞台としての使用もされなくなりました。しかし、建物の国重要民俗文化財登録を契機に昭和53年（1978）地元の有志による保存会が結成されました。演目（芸題）の練習方法、建物や舞台背景などの保存修理、後継者の育成など、いくつかの課題を克服しながら現在まで毎年白雲座歌舞伎公演が行われています。

白雲座の建物内部は、観客席が舞台に向かって緩やかに下がっていて、舞台を見やすくする工夫がされています。舞台にある回り舞台は、地階で心棒を回すことによって場面転換が行われます。地階には楽屋や花道への移動通路があり、合理的な構造となっています。また、舞台から楽屋へ降りる階段には小学校で使われていた階段を再利用する等、歴史と工夫がみられます。

公演の練習は、毎年公演前の一ヶ月に集中して行われます。地元保存会の活動は、地域の結びつきを確認する活動にもなっています。少子高齢化が進む地域で後継者を育成することは大きな課題ですが、小学生の時に「子ども歌舞伎」を経験した若い世代が、先輩たちから指導を受けながら地域の文化を引き継いでいます。近年は県の観光政策として地歌舞伎が注目されるようになってきており、白雲座以外でも公演を行う機会が増えてきています。

このレポートの作成を通して、身近な存在であった白雲座の歴史や特徴を詳しく学ぶことができ、地域の文化財としての価値を知りました。また、小学生時代からの自分自身の体験を振り返り、まとめていく中で、地歌舞伎の魅力を再確認することができました。さらに、地域の人たちから話を聞くことで、先人の努力と労力、その積み重ねによって現在の白雲座歌舞伎が成り立っていることを実感することができました。お忙しい中、取材に協力していただいた皆さんに感謝します。

自分が暮らす地域の文化を深く知ることで、地域の良さを再確認することができました。これからも地域の人たちとともに白雲座歌舞伎に関わっていきたいと考えています。



白雲座歌舞伎保存会員から話を伺う（2019年6月13日）



令和元年度公演を終えて（2019年11月3日）

地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～

愛知県立杏和高等学校 3年
熊 沢 咲 良

応募の動機

地域行事に参加したフィールドワークをきっかけに、地域の活性化について研究したいと考えました。そこで、小学生の頃に参加していた屯倉村祭囃子が5年前になくなってしまったことを受け、「自分が参加していたお祭りは何であったのか」を調べるとともに、「なぜ終わってしまったのか」を解明し、継続するための解決策を考えるために研究をすることにしました。そして研究を始めた頃、このコンテストを見つけ、応募しました。

研究レポート内容紹介

1 屯倉村祭囃子について

当時の様子と文献を照らし合わせ、担い手や様子の変化を調べました。さらに屯倉天王夏祭が行われていた屯倉社の近くにあるお寺の長福寺の住職さんや毎年お祭りに参加していた三宅小学校の校長先生に聞き取りをして、なくなってしまった原因を考察しました。なくなってしまった大きな原因として、指導者の高齢化と少子化による参加生徒の減少があげられました。この解決策の一つの手段として、卒業生が小学生に行事の楽しさを伝え、実際にお囃子を教える事を考えました。そこで卒業生に話を聞いたところ、全員がやりたいと言ってきて、なくなってしまった行事も人々に必要とされなかったのではなく、復活を願う声はまだ残っていました。

2 一時上臈について

私は屯倉天王夏祭と津島神社で稚児として神楽を舞いました。この行事は、稲沢市では「一時上臈」、津島神社では「烏呼神事」と、異なる名前と呼ばれている事がわかりました。なぜこれが三宅と津島で二回行われているのか、なぜ名前が異なるのか、疑問が尽きず、今回の研究では解明することができませんでしたがとても興味深いことだったので、今後さらに研究していきたいです。



屯倉村祭囃子が行われていた屯倉社

今後の課題

地域行事というのは、地域のコミュニティの場であり、地域の人々の結束力を高めることができます。少子高齢化によりその地域行事が衰退している地域では、過疎化が深刻化しています。地域行事を継続する解決策として、都市部の人々やインバウンドなど他者の関心を得て、担い手を増やすことを考えました。今後は地域行事を含めた、地域の良さを他者に発信するための手段を考え、行動に移していきたいと考えています。今回の研究では、新しい事を行い今までとは違う世界に足を踏み入れる新鮮さや、楽しさを知ることができました。今後また皆さんのことに挑戦し、自分の視野を広げていきたいです。



当時の様子

集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―

福岡県立修猷館高等学校 3年
谷 口 生貴斗

応募の動機

往時の半数ほどに人口が減少し、私がかつて通った文教場も閉校になるなど、過疎の進む地域の現状を目の当たりにして、一刻も早く、古くから伝えられてきた文化や民俗を後世に残すための記録を作らねばならないとの思いに駆られ、平成30年の秋から集落の調査を始めました。夏、完成した調査報告書を地域の人たちに読んで頂いた際に「どこかに提出したがよかつちなかね？」と言って下さったため、本コンテストに応募しました。

研究レポート内容紹介

福岡県糸島市王丸集落は、福岡県西部の脊振山麓に位置する、人口120人余りの小さな山村集落です。私は、集落を様々な面から調査したいと考え、民俗篇に史料篇、歴史篇を加えた集落調査報告書の作成を行いました。

民俗篇は、周辺の市町村が作成した民俗調査報告書や『民俗調査ハンドブック』、『民俗資料調査整理の実務』を参考にして、事前に質問を設定した上で、延べ20時間を超えるお年寄りへの聞き取り調査を中心に、民具調査や小祠・旧跡を巡る実地調査を実施し、調査結果を分類・整理したものです。衣食住、生産、交易、社会生活、信仰、人生儀礼、年中行事など様々な項目で、多くの民俗事象やその由来、変遷が明らかになりました。今でも続く行事や風習には、実際にいくつか参加させてもらいました。

史料篇は、福岡県立図書館や福岡市総合図書館が所蔵する江戸時代の地誌などの文献から、近世以降の集落に関する記述を抜粋したものです。戸数や人口、石高の変化や、今はない仏堂が存在していたことが判明しました。また、集落の家々に古文書の所蔵があるかどうか確かめたところ、5軒の民家と公民館から古文書を発見するに至ったため、一部は目録を作成し、民俗に関する記述がある数冊の古文書を解説しました。

歴史篇では、文献資料をもとに、江戸時代の寺子屋から現代の文教場に至る地域の教育史を研究するとともに、聞き取り調査の段階で明らかになった「伊能忠敬の腰掛石」と呼ばれる石について、伝承が生まれた背景を古文書の記述や所在地から考察しました。

調査報告書は、原稿を集落の人たちに読んでいただき、訂正・加筆を加えた後、印刷して、協力して下さった方々に配りました。



王丸集落遠景



神社の「神待ち」行事



古文書調査

今後の課題

今回は、私の住む一つの集落を調査したに過ぎません。日本各地に残る多種多様な民俗は、地域の風土に根ざして、名も無き人々が長い間育み、培ってきた貴重な遺産であると思います。いずれ、受け継ぐ人が消え失せていくであろうそれらの民俗を、せめて記録という形だけでも、後世に残していけるように、まずは周辺の集落から徐々に調査地を拡大していきたいです。調査を進めて、比較研究を行うことで、それぞれの集落や地域の民俗の特徴が明らかになり、その背景を探ることも可能になると考えます。微力ながらも、調査を続けていきたいと思っています。

地域文化研究部門選評

國學院大學教授 大石 泰夫

■総評

地域の伝統文化に学ぶコンテストの趣旨は、高校生たちが自分たちの周辺に継承されている「伝承文化」に、自主的に目を向けて課題を決め、その内容を実地で調べたり、体験的に学んだりしてレポートとしてまとめる。そして、それを進めることによって高校生たちが、地域文化の実態とその存在の意味を捉え、地域文化の今後のあり方を考える、という視点から特に優れたものを顕彰して、こうした取り組みの質を高め、活発化してゆこうというものです。

では、どういう評価基準で取組やレポートを評価するのかというと、

1. 問題発見や着想の上での独自性
2. 情報収集の上での直接性や確実性
3. 情報整理の上での論理的工夫や努力の跡
4. 立論の手順における論理的実証性
5. 結論としての新たな知見の明確性

というようになります。

身近な伝承文化を発見するということについて、今回の応募作の多くはそうした観点から出発していて、高く評価できました。

評価が大きく分かれたのは、「2」「3」で、文献調査において歴史や伝承の調査を行った上で、フィールドワークを実施して、そうした伝承文化を実感するとともに伝承者の思いを受け止めて考えられているかどうか、ということでした。伝承文化は生き物です。過去において消えてしまったのであるなら、それは何故なのか。今も伝承されているのはどうしてか。そういう問いに基づいた新たな知見につながる取組が、高く評価されたということになります。現代はネット情報で相当詳しい情報を入手することができます。しかし、人が続けている伝承文化は、肌で感じて具体的に立論したものであることが大切なのです。

また、こうした基準は、一般的な研究成果にも敷衍できるものです。これからも、このコンテストに限定されるのではなく、この1～5の評価基準を参考にし

て、このような実際的な学問探究が若い人たちによって積み重ねられてゆくと、学問の将来も大きく開けていくでしょう。

みなさんのさらなる研鑽を、心から期待したいと思います。

■団体の部

最優秀賞

「イチイからたどる「飛騨のなりたち」 ー飛騨の伝承文化に学ぶー」

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

飛騨の成り立ちを「飛騨と中央との関係」から読み解こうと、伝統工芸一刀彫の材料であるイチイを基軸にして多角的に調査し、詳細にその成果をまとめています。

イチイは岐阜県の県木とされていますが、イチイは「一位」で、この材で作った笏により天皇から正一位の位を授かったという伝承を知ったことをきっかけにして、古典籍に伝えられる「両面宿禰」（『日本書紀』）「飛騨国の馬の献上」（『続日本紀』）「飛騨工」（『今昔物語集』）、現在に伝わるイチイの一刀彫りと中山和紙の技術を、文献調査において歴史や伝承の調査を行った上で、丹念なフィールドワークを実施して調査したレポートです。

文献を丹念に押さえた上で、現在に伝承される文化を体験することで、飛騨の独自の文化が中央とのかかわりの中で特色づけられて伝承されていることが、実感を伴って良くまとめられています。

優秀賞

「知られざる深良用水の恩恵 ～深良用水の恩恵は深良（裾野市）だけではなかった。～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部 用水班

深良用水（ふからようすい）という藩政期に作られた灌漑用水の効用を、信仰行事に至るまで詳細に調査してまとめています。

沼津城北高校の生徒の七割が、小学校から知っている芦ノ湖を水源とする深良用水。その実態についてを調査したのですが、この用水による水の管理運営の

ためのあり方がよく調査され、水を芦ノ湖から引くということから生じる箱根神社への信仰、必要な文書を保存管理していくための年中行事「虫干し会」の参与調査もレポートには詳細に報告されています。

優秀賞

「出雲の神話が語ること」

東京都・香蘭女学校高等科

出雲研修

出雲神話について文献の調査と、神社や考古遺跡を中心にしたフィールドワークのレポートを詳細にまとめたものです。

高校生が研修旅行（修学旅行）に行く機会は、ほとんどの生徒にあるのではないのでしょうか。このレポートはそうした研修旅行を行う上で、事前の調査、旅行時のフィールドワークのあり方などが高く評価できるものとなっています。出雲地方は出雲神話のふるさとであり、考古遺跡も豊富にあります。したがって、研修旅行には理想的ですが、この取組では外国人である小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が見た出雲についての一節を設け、外国人の記述をも視野に入れた研修を行っています。地域の伝承文化というものが、外部の人にはどのように見られるのかということも、大事な視点です。

佳作

「幻の甚目寺飛行場 ～戦後74年目証言を聴く～」

愛知県立杏和高等学校

歴史研究グループ

太平洋戦争時に地域に存在した飛行場の記憶を、当時の新聞等の記録及び当時を知る古老からの詳細な聞き書きを記録したものです。レポートとしての筆力が優れています。

扱ったテーマは、近代のある地域の歴史の一齣を、当時を知る人たちからの聞き書きによって掘り起こすというもので、伝承文化として扱うべきものなのかということ自体が問われることかも知れません。しかし、伝承文化とは、調査時現在まで残っているものばかりを対象とするものではありません。なくなってしまったものは何故なくなったのか、そのことによって何を学ぶことができるのか、ということも重要なテーマな

のです。

佳作

「因幡の手笠踊りについて」

鳥取県立八頭高等学校

因幡のカサ踊り研究会

手傘踊りについて調査をまとめたもので、あまり長いレポートではありませんが、問題意識が鮮明で、従来の通説を明確に否定するなどレポートとして優れています。

因幡地方の傘踊りの手傘を使う雨乞い踊りに由来するとする通説に対して、手傘踊りと雨乞い踊りの芸能の違いを指摘し、一方同様の比較から手傘踊りは山形県尾花沢市の花笠踊りと共通性があることを論じるとともに、伝承者の意識も取り入れて、その関連性を論じていて、結果として通説の見直しを主張しています。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」

鹿児島県立屋久島高等学校

中島 渚

屋久島の民具の重要性を調査するとともに、それを島民に認識してもらう試みとして、現在使用されなくなった民具を用いた回想法を盛り込んだレクリエーションを行って、その効果を検証しています。

「民具」というような概念は、高校までの教育課程の中にはあまり大きく位置づけられていません。このレポートでは先行研究を踏まえつつ、30年前に行われた調査以降、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代に民具がどのようなになったのか、ということを根本的な問いとして発しています。そして、使われなくなった「民具を用いての回想法」（回想法は認知症の予防や治療で注目されている）として、民具のレクリエーションを実践し、その効果の検討を行うというレポートとなっています。

レクリエーションの内容は、民具の紹介、民具についてのクイズ、思い出のある民具について語ってもらうというような内容で、これについてのアンケートを合わせて行っています。

結果としては、多くの民具が失われつつある現状が明らかになり、レクリエーションについては高齢者にとっても高校生にとっても好評であったことが報告されています。

今回の取組によって、企画者側の意識はもちろん、参加者にとっても民具を意識づけることになったと思われる。

優秀賞

「高田富士考 ―新宿区のともしび 地域性を追いかけて―」

東京都・東洋高等学校

八木 つきの

新宿区内の富士講を調査対象として、現状の富士講の聞き取り調査を含め詳細に調査したものです。

新宿区に住む高校生が、地域に伝えられる富士講という江戸期以来の信仰に注目して、文献調査と先行研究を丹念に調べています。

そして、水稻稲荷神社境内にある1779年に作られた富士塚である高田富士を実地調査して、富士講の現状についての聞き書き調査を行ってレポートしています。

優秀賞

「白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～」

岐阜県立益田清風高等学校

田口 真江

下呂市門和佐の白山神社境内にある「白雲座」と呼ばれる芝居小屋は、藩政期から地芝居の舞台として現

在まで機能していますが、その白雲座の現状と歴史等を、聞き書きを交えて詳細に調査報告したものです。

この白雲座は回り舞台が設置されていて、国指定重要有形民俗文化財に指定されていますが、現在でも地歌舞伎が上演され続けている劇場です。その上演状況の全体像と、一つの演目を演じるための稽古から本番までが詳細にレポートされています。

佳作

「地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～」

愛知県立杏和高等学校

熊沢 咲良

自らが参加した地域の祭りと芸能の記憶をたどりながら、文献調査と現状の状況をフィールドワークで調査し、今後の継承の課題をまとめています。

具体的には稲沢市平和町三宅に伝承される屯倉村囃子を、小学校から中学校にかけての4年間演じた記憶を元にこれを振り返って調査、レポートしたものです。

佳作

「集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―」

福岡県立修猷館高等学校

谷口 生貴斗

詳細な集落の調査報告書で、「民俗編」「歴史編」「史料編」「地名編」（地名編は未提出）からなっています。民俗編については自治体などが行う集落の総合的な民俗誌の報告書の形に習っているものです。「史料編」は古文書の翻刻となっていて、総合的な報告書として高く評価できます。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹

■団体の部

最優秀賞

「イチイからたどる「飛騨のなりたち」 ―飛騨の伝承文化に学ぶ―

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

グランド脇で見かけるイチイという木に注目し、そこから広がる飛騨の歴史と文化を描き出した力作。「両面宿禰の伝説」「飛騨の馬と紙絵馬」「飛騨工」「イチイと一位一刀彫」「飛騨河合と山中和紙」の5つのテーマを設定し、グループごとに現地調査を行い、関連する史資料をもとに課題を掘り下げて考察している。一見、異なるかに思える各テーマだが、イチイを軸に有機的で多様なつながりの輪を形成していることを発見し、相関関係を提示した点が大きな成果である。また、関係者からの聞き書きと今後の活用法は、今日的な課題を浮き彫りにしていて示唆に富む。

優秀賞

「知られざる深良用水の恩恵 ～深良用水の恩恵は深良(裾野市)だけではなかった。～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部 用水班

1666年から4年の歳月をかけて完成した深良用水(箱根用水)の水は、一体どこまで流れているのか。この疑問を解くには、田畑に引く水の分配や水門(堰)の設置など、用水をめぐる地域の人々が歩んできた生活の歴史への視点が欠かせない。地元に残る文書を読み解き、現地を歩きながら課題に迫っている。深良用水の名称から裾野市深良のイメージがつよいが、実際には長泉町や清水町にまで及んでおり、水の利害をめぐる厳しい状況にあったこの地域が、用水の恩恵が最も大きかったとの指摘は興味深い。

優秀賞

「出雲の神話が語ること」

東京都・香蘭女学校高等科

出雲研修

授業で学んだ『古事記』の学習から芽生えた疑問や関心をもとに、出雲にゆかりの神話、神社、遺跡をはじめ、文学者の小泉八雲について調べた成果をまとめ

たもの。事前の調査が実に周到に準備されている。それぞれが、興味をもったテーマについての課題が明確に示されており、現地での研修によく生かされていることがわかる。それは「実際に現場に行って実物と向き合い、自分の知識を整理することの大切さを私たちは今回の出雲研修で学んだ」という言葉に表れている。

佳作

「幻の甚目寺飛行場 ～戦後74年目証言を聴く～」

愛知県立杏和高等学校

歴史研究グループ

アジア太平洋戦争末期につくられた甚目飛行場(清州飛行場)は、現在、ほとんど忘れられた存在といえてよい。メンバーは新聞記事や地図、写真などを駆使して、飛行場建設の事情や当時の様子、今日までの移り変わりの姿を明らかにしている。なかでも、終戦当時旧制中学校の生徒で、飛行場での労働に従事した4人の男性からの聞き書きは、体験者の話だけに真に迫る内容で充実している。まとめるにあたっては、地元の歴史民俗資料館の学芸員の方のアドバイスが大きかったことがわかる。

佳作

「因幡の手笠踊りについて」

鳥取県立八頭高等学校

因幡のカサ踊り研究会

因幡の手笠踊りの起源について考察したものである。最初に、山形県の花笠踊りが伝えられたのが始まりとする説と、雨乞い踊りに由来するという二説を紹介する。その上で、文献、聞き書き、踊りの動作の比較といった作業を重ねた結果、手笠踊りは、山形県尾花沢市の花笠踊りと因幡の傘踊りの影響のもとに成立したと結論づけている。傘踊りとの関係では共通する言葉の使用や合図にホイッスルを用いる点、花笠踊りの場合は「笠まわし」と呼ばれる動作が双方に見られることを指摘して説得力に富む。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」

鹿児島県立屋久島高等学校

中島 渚

屋久島の人々の生活を支えてきた民具は、現在どのような状況にあるのだろうか。使われなくなった民具を有効活用する方法はないのか。屋久島歴史民俗資料

館などの協力を得て実施したアンケートや、高校生と高齢者によるレクリエーションの結果を分析し考察した力作である。多様な民具のなかでも、日常の身近な生活の場で使われてきた民具ほど認知度が高いことがわかる。また、民具を活用したレクリエーションが、高齢者の記憶を生き生きと蘇らせ、若者との交流のきっかけの場になったとの指摘は示唆深い。民具の保存と活用は、これからの大きな課題である。

優秀賞

「高田富士考 ―新宿区のともしび 地域性を追いかけて―」

東京都・東洋高等学校

八木 つきの

新宿区における富士講、富士塚の実態、とくに高田富士の現在の状況について現地調査をもとに明らかにしたものである。まず、富士講および富士塚の歴史と組織の特徴について、主に文献を用いて整理し、その要点を実に手際よくまとめている。7月の富士祭り(山開き)に行なった調査の報告では、丸藤宮元講社の先達である井田三郎氏からの聞き書きが印象深い。富士講の組織の高齢化や先達の後継者問題など、現在の高田富士がおかれている厳しい現実を的確に伝えている。

優秀賞

「白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～」

岐阜県立益田清風高等学校

田口 真江

下呂市門和佐の白雲座で行われる地歌舞伎について、その歴史と現状を田口さん自身の体験を踏まえてまとめたもの。関連する文献に目を通し、白雲座が現在の姿になるまでの歴史的な移り変わりを、関係者からの聞き書きを交えて解説している。構成がしっかりしている。内容がわかりやすいのは、写真や図の効果的な利用もあるだろう。平成30年度公演「新版歌祭文 野崎村」の記録は、田口さんが出演した舞台だけに、練習風景や本番前の緊張感が手に取るように描かれていて印象的である。

佳作

「地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～」

愛知県立杏和高等学校

熊沢 咲良

熊沢さんが中学三年生のとき、屯倉夏祭り（稲沢市）

の囃子が中止になった。なぜ終わってしまったのか。子どもの頃に神楽を舞い祭囃子に参加した体験をもとに、祭りの歴史と民俗、そして囃子を維持するのが困難になった経緯と今後の展望についてまとめたものである。また、津島神社（津島市）の神事に参加した経験を振り返って取り上げた「一時上臈」と「烏呼神事」は、民俗的な背景がよく調べられていて読み応えがある。添付資料も充実しており、さらなる論究が期待される。

佳作

「集落の調査 ―福岡県糸島市王丸集落―」

福岡県立修猷館高等学校

谷口 生貴斗

糸島市の王丸集落で一年間に亘って行った民俗調査の報告を核に、「史料篇」「歴史篇」を加えてまとめたもの。民俗の広い領域を一人で調査し、さらに関連する史資料の収集は容易ではなかっただろう。継続して取り組んだ努力の賜物である。資料の報告が中心だが、そのなかで「続・伊能忠敬の腰掛け石伝承について」の考察は、江戸期の文書を用いて伝説の背景を推測した内容で興味深い。今後、王丸集落の民俗世界を、歴史を踏まえた多面的な視野から生き生きと描く研究を期待したい。

■総評

読み応えのある充実した内容の作品が揃いました。取り上げるテーマも、民具、神話、祭り、信仰など多彩です。団体の部最優秀賞の益田清風高等学校「イチイからたどる「飛騨のなりたち」―飛騨の伝承文化に学ぶ―」は、身近にある一つの植物の背後に、地域の歴史と文化が多様な姿で広がりつながっていることを発見した作品で、グループ研究の総合力が発揮された例といえるでしょう。個人の部最優秀賞中島渚君の「民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響」は、アンケートの実施や高齢者との交流を通して得られた成果で、課題に取り組む積極的な活動が光っています。民俗学の根底には、私たちの目の前にある疑問や関心が横たわっています。伝承といういとなみに注目しながら、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知恵・技術・心意などを明らかにしていくところに特徴があります。これからも、身近に生起する話題に関心をもって取り組んでください。

最優秀賞

地域民話研究部門（団体）

こんなんあったけん調べてみた！！

－久谷地区・砥部町の伝承たち－

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

（小椋詠亮、山口翔聖、渡部良磨、只木克己、石田咲良）

応募の動機

愛媛県松山市の郊外にある久谷地区は中山間地域にあり、少子高齢化が進んでいる。この地区には、お遍路さんや狸にまつわる伝承が数多くあり、この伝承を掘り起こすことによって久谷地区を活性化できないかと考え、久谷地区の伝承調査を開始した。1年次、2年次、3年次と活動報告をコンテストに出品し、1年次は落選、2年次には佳作、3年次には最優秀を受賞することができた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たち東温高等学校郷土芸能部は、久谷地区に伝わる四国遍路の元祖衛門三郎に関する「衛門三郎伝説」、狗神刑部狸を頭目とする「八百八狸伝承」、砥部地区に伝わる楠木正成を摂津湊川で討ち取った豪勇大森彦七に関する「大森彦七伝承」等について調査した。

調査方法は、「川内町誌」・「重信町誌」・「砥部町誌」等の文献資料に当たるとともに、お遍路さん、神社の宮司さん、神社の祭りの参拝者、狸伝承の研究者等及び、久谷中学校の一年生89名にアンケート調査を実施した。

調査の結果、「衛門三郎伝説」の最古の文字記録が永禄十年に河野通宣が作成させた、石手寺刻板（木の板に文字を刻んだ記録）であることが分かり、病に臥せていた河野通宣期に、河野氏家中を動かしていたのが、久谷地区の国人領主平岡房実であったことから、房実が久谷地区にあった衛門三郎伝承を河野氏の本拠道後湯築城に伝え、衛門三郎が河野の家に生まれ変わったとして、河野氏と衛門三郎及び弘法大師を結びつけ、河野氏の伊予における宗教的支配の正当性を打ち立てた可能性があるかと推測した。また、「八百八狸伝承」は、享保期に松山藩内で起こった家老同士の権力争いが藩主毒殺計画に置き換えられ、享保の大飢饉時に起こった久万山騒動という惣百姓一揆の群れが、狗神刑部狸の眷属である八百八狸のモデルであることが分かった。この点から、久谷地区に伝わる民間伝承の裏には歴史的事実が隠されていることが分かった。

また、地域の方々や久谷中学校の生徒から取ったアンケート結果から、久谷地区の人たちは、地元の伝承である「衛門三郎伝説」について詳しく知っているが、隣の砥部地区の伝承である「大森彦七伝承」については知らないことが分かった。逆に、砥部地区の人たちは、「大森彦七伝承」については知っているが、「衛門三郎伝説」については知らないと答えた方が多かった。このことから、伝承は、現在でも、口伝によって、狭いコミュニティの中で伝えられていることが分かった。

私たちは、この研究を元に、久谷地区の中学生に久谷への愛着心をより高めてもらおうと考え、「衛門三郎伝説」を紙芝居にして、一年生の総合的な学習の時間に体育館で披露した。

アンケート結果は、「大変面白かった」という回答が多くおおむね好評であった。今後も、地域に眠っている伝承を掘り起こし、伝承を通して地域の皆さんに元気になってもらう活動を続けていきたいと考える。



松山道後石手寺の衛門三郎像



松山市立久谷中学校で披露した紙芝居

『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分について
～舞台は古代下野国塩谷郡だった～栃木県立矢板東高等学校
リベラルアーツ同好会(池亀優作、安達奏音、石崎莉菜、菊地康平、坂巻朝香、佐藤乙羽、
佐藤恵、鈴木野乃花、相馬優吾、星野桃子、増子晃希)

応募の動機

私たちが通学している栃木県矢板市には石碑石仏が多く残っている。一つ一つ形が違っているが、そのような違いにも、そこに存在する意味も知ることがなかった。授業で黒曜石やナウマンゾウの化石が矢板市からも出土していることを聞いて、もっと地域の歴史に触れたいと思うようになった。それが今回の研究の出発点である。

研究レポート内容紹介・今後の課題

『今昔物語集』卷三十第十は下野国の馬を題材にした物語であり、この物語には郡の明記がなく意識的欠字部分となっている。今回は、その意識的欠字部分に該当するのが現在の矢板市を中心とする塩谷郡であったという可能性を考察した。

まず、史資料をもとに古代塩谷郡と馬との関わりについて考察した。史資料から、古代の塩谷郡には七郷あり、そのなかから山上郷と片岡郷の二郷が現在の矢板市に該当することがわかった。そのうち、山上郷はその言葉から山を中心にした地名だと考えられ、矢板市の高原山または堀江山がその候補にあがる。高原山は黒曜石原産地遺跡群が発見されていて、古代において他地域との交易があったと考えられる。また、堀江山付近では星宮神社を祀る集団が奈良時代には形成されており、人や動物の往来があったと推測できる。これらの地域で輸送手段として馬などが使用されていたと考えられ、この2つの山を中心として古代の矢板市は馬と関係の深い地域だったと推測される。

次に、矢板市の民話をもとに、古代の矢板市を中心とする塩谷郡と馬との関わりについて考察した。民話を読み解いていくと、矢板市の民話の一つである「高原山の盗賊退治」には、同様の民話が2話見つかるなど不可解な点があることがわかった。これらの話には、共通する点が多く見られることから、時代が経つにつれて、民話どうしが混同してしまったと考える。また、高原山にある八海山神社については、『矢板市史』にも記載が無く、不明な点が多い。八海山神社と民話の中心人物である藤原房前との関係性が分かれば、矢板の民話の方が時代設定が早いと、これらの類似した民話の出発点と考えられる。馬との関係を見ても、矢板の民話に登場する馬館のみ現在も地名として残っていることや、矢板市の寺山観音寺に伝わる仏像からも、馬との関係の深い土地であったと推測される。

最後に、馬頭観音像を中心とする石碑石仏や神社仏閣から馬との関わりについて考察した。現在点在する馬頭観音のほとんどが近世以降のものであるため、古代との関連はわからなかった。また、神社仏閣では、その地に伝わる民話・伝承を参考にしたときに古代からの馬への信仰の厚さがうかがえた。特に矢板市玉田の勝善生駒神社は、古代塩谷郡から矢板の人々の馬の神様への信仰が現在も続いていることを物語っている。

本研究では、以上に述べたように史資料からみる古代塩谷郡と馬との関わり、民話からみる古代塩谷郡と馬との関わり、馬頭観音像はじめ石碑石仏および神社仏閣からみる古代塩谷郡と馬との関わりという3つの観点に適宜フィールドワークを加えて、『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分が現在の矢板市を中心とする塩谷郡であるという可能性を考察した。その結果、古代塩谷郡は馬との関わりの深い地域であり、『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分が塩谷郡である可能性が十分にあることがわかった。

今回、古代塩谷郡を調べるにあたってフィールドワークを積極的に行い、新しい考え方や発見が生まれた。このように、机上の学習だけでなく実際に足を運んで学習することが重要であると思い、これからは積極的にフィールドワークを行ってきたい。今後もこのような活動を通して、地域に根付いている文化や歴史に関することを調べていきたいと思っている。



馬頭観音の現地調査



地形図を活用した民話の考察

「謝文旦」は実在したのか ～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～

鹿児島県立鶴翔高等学校
地域文化研究同好会
(平田あや、倉津優奈)

応募の動機

鹿児島県阿久根市は、「文旦（ボンタン）」という柑橘の特産地として有名である。

この文旦は、阿久根に漂着した中国船の船長「^{シェイフンタン}謝文旦」に因んで名づけられたという。

しかし、昨年台湾を訪問した際、台湾にも「文旦」という名前の大型の柑橘が栽培されているということを知った。そこで、そもそも謝文旦という人物は本当に実在したのか明らかにしようと調査を進めた。



阿久根特産のボンタン

研究レポート内容紹介

(1) 文旦伝来に関わる書物の調査

——江戸時代、阿久根に漂着した中国の難破船を阿久根の人々が助けた。そのお礼として謝文旦という人物が中国のミカンを与え、それを謝文旦の名前から文旦と呼ぶようになった。

私たちはこの民話の由来について、『三国名勝図会』、『阿久根郷土史』という書物の記述を調べることにした。この二つにはいくつかの差異があったが、文旦を受け取った人物の原田喜右衛門という唐通詞はどちらにも登場している。

(2) 文旦のルーツを探る調査についての聞き取り

阿久根文旦のルーツについて、地元のロータリークラブが調査を行っており、その調査内容について聞き取りを行った。その際にいただいた中国や台湾の農業資料によると、中国では一般に文旦は「柚」と呼ばれているが、中国大陸南部には「文旦」と呼ばれる「柚」があり、それが台湾にも伝わったと言われている。そうすると、そもそも「文旦（柚）」と呼ばれていたものが阿久根に伝わってきた、と考えるほうが自然なのではないか。

(3) 文旦の語源についての調査

文旦の語源を様々な事典や辞典で調べた。やはり、古来中国では「柚」という呼び名が一般的であった。中国南部の方言として「文旦柚」という呼び名も見られた。そうすると「もともと中国南部では文旦と呼ばれていたミカンが阿久根に伝来した」と考える方がきわめて自然だろう。よって残念ながら、「謝文旦」は実在しなかったと私たちは結論づけた。

(4) 追加調査

「謝文旦」がいなかったとしても、「文旦」はなにがしかの手段で伝わったはずである。そこで、阿久根と世界とのつながりをキーワードに、資料を見直し、また阿久根市の郷土資料館を訪れて、追加調査を行った。

- ① 室町時代：罷里「波留」
- ② 戦国時代：とっぼどんの墓と阿久根砲
- ③ 江戸時代初め：唐通詞の河南源兵衛、密貿易
- ④ 1700年代中頃：唐通詞の原田喜右衛門



密貿易が行われていたという桑島を望む

今後の課題

謝文旦は実在しなかった、ということが私たちの結論である。しかしこの研究から、古い時代、阿久根が海の道へ通じる国際的な港だった一面も見えてきた。

今後については、私たちの結論を証明する資料をさらに調査していきたいと考えている。まず、「謝文旦」が実在しなかったという確実な証拠を探し、そして「謝文旦」という名前がどういった経緯で出てきたか、阿久根に中国の船が漂着したという記録がないかといった点について調査していきたい。

昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察

静岡県立韮山高等学校

課題研究班

（荻野智也、榊原尚子、古屋美菜、前田陽菜乃、三津間綺香）

応募の動機

私たちは、「課題研究」の授業を通して、昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造について研究してきました。伊豆の昔話を収集し、話の型ごとに分類して、日本の一般的な昔話と伊豆の昔話を比較しました。研究を進めていくなかで、外部から客観的な評価を受けることでより研究内容を深めたいと考え、貴コンテストに応募いたしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

臨床心理学者の河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』によれば、日本人に親しまれてきた昔話には日本独特の、西洋とは違う自我の意識が現れ、構造的にも違いがみられるとされています。この論文は、前述したことを前提にして、昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造について、『うぐいすの里』『鶴女房』『火男』の3作品に焦点を当てて研究し、その際に立てた仮説、研究目的、得られた結果、考察をまとめたものです。以下に論文の内容を簡潔に示します。

まず、研究する上で、次の2つの仮説を立てました。1つ目は、伊豆地方の昔話にも、日本の昔話と同様に日本人特有の精神構造がみられるであろうということです。2つ目は、伊豆の昔話には、風土などに基づき、一般的な日本の昔話とは構造の違いがあるものも存在するのではないかとということです。これをもとに、全国の昔話と伊豆の昔話を比較した結果、『うぐいすの里』では、物語の最後に去る鶯が蛇に置き換えられている物語が多くみられました。『鶴女房』では、禁止をする者と破る者の立場が逆でした。『火男』では、類話である「継子と継母」の話自体が多く存在していました。また、「継子と継母」の典型とは逆の話がいくつかみられました。

この結果から、伊豆の昔話に見られる伊豆の人々の伝統的な精神構造については、自然に対しては無力さを感じており、自然への敬意、理不尽を受容する心、万物を同等とみなす心が大切にされていることが読み取れました。昔話を読み聞かせることで子どもたちの自我形成において育まれるものは、外国人は、ロマンを持ち自立的で積極的な姿勢や行動であるのに対し、日本人は、自然を含む周囲との調和を図っていこうとする姿勢や行動であることがわかりました。伊豆の人々は、すべてを受容していく姿勢や行動の一面性が育まれていくことが読み取れました。

最後に、私たちが研究を行ってきた中で2つの課題が見つかりました。1つ目は、十分な数の研究資料を集められなかったことです。研究資料として伊豆の昔話の収集量を増やすことで研究の幅を広げていこうと思います。2つ目は、実地調査を行うことです。実際に足を運んで目で確かめることによって、より確実に深い研究となるように努めていきたいです。

また、昔話の根源となっている『古事記』をはじめとした歴史書などと絡めた研究を行っていくと、より深く掘り下げた研究が行えると思いました。



受賞を聞き喜ぶ班員



論文作成中 語り合う班員

山梨県立甲府第一高等学校

探究2班

（川崎葵衣、志村ひまり、赤松明、齊藤優美）

応募の動機

民話とは民衆の中から生まれ、語り継がれてきた説話のことである。現在、民話は危機に瀕している。民話を知らない子供たちが増えてきているのだ。ある調査によると、「桃太郎が持っているものは何か？」という質問の正答率が減少している。また、同学年である二年生に行ったアンケートで、民話に興味がないと答えた人の数が多かった。しかし、民話が好きと答えた人の数も多く、我々が民話について調査し、それを伝えることによって、民話に興味を持つ人が増えるのではないかと考え、その結果をまとめたものを応募することにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

探究方法

- ・ 山梨県の民話について調査する。
- ・ 隣県の民話、研修旅行で訪れた台湾の民話を調べる。
- ・ 共通点、相違点などを調べ、考察する。

探究結果および考察

i 結果

- ・ 山梨県の民話と隣県の民話を調査したところ、同じような系統の話や、ほぼ同じ話が複数見つかった。
- ・ 台湾の民話と比較したところ、完全に同じような内容というような話はなかったが、共通点がみられた。台湾とは文化の違いというべき民話の違いもみられた。



台湾研修旅行にて、台湾の高校生の前で研究発表

ii 考察

A) 昔の日本人の共通意識

- ・ 継子がいじめられながらも成功する物語が多い。日本人は継子ものが好き。なお、台湾でも共通。
- ・ 非常に大きなおならをする人が多い。日本人はおならを面白がっていた。
- ・ 娘を動物の嫁にやれば様々な問題が解決する。その際に末娘だけが了承することから、末娘は優しいという認識がある。
- ・ 村の問題はお年寄りの知恵で解決する。お年寄りや親を大事にするべきという考えがある。
- ・ 淵の中には龍が住んでいたり、竜宮城があったりする。日本人は淵の中には不思議なものが多いと考えていた。
- ・ 河童は毎回失敗し、村の人々に懲らしめられて改心する。日本人は河童を恐れるのではなく面白がっていた。

B) 日本と台湾の民話の共通点

- ・ 日本の「河童」と台湾の「モシナ」は同じ系統のものである可能性がある。
- ・ 台湾の人も継子ものが好き。
- ・ 川から流れてきた子供が活躍。例：日本「桃太郎」、台湾「天童」
- ・ ヘビ、カエル、サル等動物と結婚する話がある。

C) 日本と台湾の民話の相違点

- ・ 中秋節（八月十五夜）は台湾の一大イベントで、休日にもなっている。中秋節にまつわる話が多くみられた。
- ・ 日本には月に関する民話はほとんど見られないが、台湾には月に関する民話が多くある。月を大切にするのは中国の影響だと思われる。

D) 河童とモシナに関して

- ・ モシナは、容姿や行動で河童に似ていたが、河童のような滑稽さはなく、台湾では恐ろしいものとして映画化もされていた。また、モシナのほかに世界各地で同じような妖怪がいることが分かった。
- ・ 河童に関しては、川から流れてきただけでなく、竹取物語のかぐや姫のように、罪を犯して天から地上に落とされたという共通点があった。この話には桃太郎のように鬼退治をする場面はない。拾ってくれた夫婦を大切に世話し、彼らが亡くなった後お墓を建てる。ここには儒教的な考えがみられ、中国の影響を受けていると考えられる。

結論及び今後の展望

今回の調査で山梨の民話と日本の中での民話や台湾の民話とのつながりが明らかになった。今度はさらに、山梨の近県だけでなく、日本国内での遠く離れた地域の民話についてさらに詳しく調べていこうと考えている。また、今回内容面のみ共通点、相違点であったので、それ以外の観点からも調査を進めていきたい。

さらに、今回調査したことを様々な人に伝えていきたいと考えている。特に研修旅行で交流した台湾の高校生の方々とお互いの民話を共有できる機会がもてれば、と考えている。

日本人と「桜」の伝説について

愛媛・済美平成中等教育学校 4年
砂野光咲

応募の動機

私は小学生の頃、「うば桜伝説」という伝説を初めて耳にしました。特に伝説に興味がなかった私は、中学2年の冬に、「うば桜伝説」の話を祖母としたことがきっかけで再びそれを思い出し、「うば桜伝説」をテーマに。そうして論文を書き上げた後、このコンテストの存在を知り、応募を決めました。

研究レポート内容紹介

県内の桜の伝説（十六桜伝説・薄墨桜伝説・うば桜伝説・お姫桜の吉凶占い）及び県外の桜の伝説（血脈桜・血桜・世間桜・世の中桜・はなさかじいさんの昔話）を調べ、共通点を探した結果、桜はこの世の超次元な人と人間を繋ぐ役割があると信じられてきたこと、伝説には時代と共に変わりゆく性質があるということが分かりました。このことから、伝説は、昔の日本人から受け継がれてきた思想のほんの一部分に触れることが出来るものであるといえます。また、「花咲爺」について述べた柳田国男は著書で、元は山の神様、神の使いである犬の両者についての民話だったのに、近世にかけて童話化されるにつれて、内容が物語の面白さを重視したものに移り変わっていると述べました。伝説は、昔の人の精神や思考に限りなく近づける装置である一方で、現代人に都合の良い解釈となるように中身が改変され、後には一度聞いただけでは何を伝えたかったのか分からないといった事態を引き起こしてしまう存在でもあります。

今後の課題

伝説を理解することは、私たちが、自分自身について深く知ることと同義です。これが伝説の魅力の正体であると私は考えました。しかし、多くの人々は伝説を調べることもなく、また興味さえありません。それは、伝説の知名度から見て取れます。新しいものにばかり目がくらんで、自分の足元、つまりは根底にある思考回路について全く顧みないというのは、とても危険な行為であるし、日本人として悲しい行為です。私は、伝説の持つ神秘的な魅力についても多くの人に味わってほしいですが、それ以上に、与えられている素晴らしい権利を自ら手放してしまっているという危機感にも気付いてほしいと思います。それゆえ今後の課題としては、伝説を多角的に見つめ、次世代に伝えていくだけでなく、伝説・伝承の「知名度」についても焦点を当て、更に研究を進めていきたいと思っています。



大宝寺にあるうば桜像



うば桜外観

応募の動機

地域の民話について調査を始めたのは、国際地理の授業で課題として出されたことがきっかけだった。当初は学校の課題として取り組んでいたが、次第に楽しさを見出すようになり、最終的には好奇心の赴くままに楽しんで学ぶことができた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

1. 概要

今回私が調べたのは、伊豆半島に由来する「河童の甕」という民話だ。調べていくなかで、民話は様々なものとなつていくことでその存在を広め、次の世代へと語り継いでいくことが分かった。そこで、本稿では、民話との「つながり」というキーワードを設定し、それに基づいて伊豆の民話の現状と課題を探っていく。

2. 調査方法

下調べをしているうちに実際に民話の舞台に足を運びたくなったため、伊豆半島で一泊二日の現地調査をした。訪問先は、「河童の甕」がある栖足寺、栖足寺から帰る途中にあった小杉原、そして松崎町役場の三か所だ。栖足寺の住職をはじめとする町の人々に聞き込み調査を行った。

3. 四つのつながり

現地調査の中で、私は民話を取り巻く四つの「つながり」を見つけた。

一つ目は、栖足寺と民話のつながりだ。「河童の甕」は、栖足寺というお寺の和尚さんと河童の話だ。約300年前の和尚さんと河童の「つながり」の証が、「河童の甕」だったのだ。

二つ目は、栖足寺と参詣者のつながりだ。栖足寺では、参詣者が「河童の甕」についてよく知れるように充実したギャラリーが設けられている。また、参詣者を増やす工夫として、近年の御朱印集めブームに合わせて数十種類の御朱印のデザインが並べられていた。

三つ目は、栖足寺と地域のつながりだ。ご住職は、地域の全住民に河童の民話を伝えることが目標だとおっしゃっていた。そのために、お寺でイベントを行ったり小学校を訪問したりして、地域の住民に民話を広めているそうだ。

四つ目は、栖足寺と全国のつながりだ。栖足寺では、伊豆だけでなく全国の人に参詣してもらえよう、ホームページやFacebookなどのメディアを活用している。民話を英語で紹介しているページもあり、民話の伝承に力を入れていることが良く分かった。

このように栖足寺では、参詣者、地域、その他多くの人々とのつながりを強めるための工夫があちこちに凝らされている。そして、彼らが栖足寺とつながることは、彼らと「河童と甕」の民話をつなげることを意味しているのだ。つまり、民話は栖足寺の力を借りて、間接的にその存在を広めているといえる。

4. 課題

ご住職は、若者の参詣者が少ないことが課題だとおっしゃっていた。栖足寺はFacebookを使って情報を発信しているが、その利用者数は10代、20代を中心に年々減少している。そこで、InstagramやTwitterなど若者の利用者が多いSNSを駆使することで、高齢化による参詣者の年齢層の低下に対応し、未来を生きる若者に民話を語り継げると私は考える。

5. 感想

民話の調査を通して、古くからのものを残すためには現代の技術を取り入れることが有効であり、それらを如何に使いこなせるかが今後問われていくのだと感じた。

また、フィールドワークをすることで生きた情報を集めることができたので、沢山の質問に丁寧に答えてくださったご住職に、とても感謝している。これからも、栖足寺が、そして「河童の甕」が、つながりの輪を広げていってほしい。



栖足寺の石柱



河童の甕ギャラリー

オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～

千葉・流通経済大学附属柏高等学校 2年
坂 入 茉 緒

応募の動機

選択国語という授業で自分の地元の文化や民話を調べる機会があった。そのとき、はじめて流山市に民話があると知った。中でも興味を持ったのは馬に関する民話だ。市内の駅には馬のオブジェがあり、民話と関係しているのではないかと思い、研究を始めた。夏休みを利用して研究を深め、コンテストに応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

千葉県流山市には「オランダ観音さま」という民話がある。江戸時代初期の頃、小金牧に気の荒い馬がいた。オランダから来たその馬は村になじめず、野馬土手を飛び越えて田畑を荒らしたり、人に噛みついたりして村人を困らせた。みかねた牧士はオランダ馬を鉄砲で撃ってしまう。村人は異国の地で亡くなったオランダ馬を哀れみ、馬頭観音を建立して馬の霊を慰めた。村人を困らせたにも関わらず、1頭のオランダ馬のために馬頭観音を建て、民話として残したのはなぜか疑問に思った。そこで2つの問いを立て、調査を行った。

1. 「オランダ観音」が民話として残されているのはなぜか。

まず、現在のオランダ観音はどのように残されているのかを調べた。オランダ観音までの道は舗装され、お菓子や水がお供えされていた。今でも大切に保存されているが、鳥居や看板は無くなっており、地域の中での歴史的価値が下がっていると考えられる。民話として残ったのは馬による被害があまりにも大きかったこと、あるいは民話のような出来事が日常的に起こっていたことが理由だと考える。そこで馬頭観音を立て、民話として語り継ぎ、人々の記憶から忘れられないようにした。

2. 馬は流山市にどのような影響を与えたのか。

始めに、現在残っている市内15か所の野馬土手を調査した。綺麗に残されている土手もあったが、崩されて住宅地になっていた土手が多かった。小金牧についての知識のある人が少ないことが原因だと考える。現在では市の境界やバス停になっている土手もあり、間接的に馬と関わり合いながら生活している。また、馬をきっかけに福島県相馬市と姉妹都市になったり、馬のオブジェが公園や駅構内に置かれたりしている。牧があった時代、馬と村人はともに生活していた。そのため、村人の生活の中に野馬土手を作ること、直すこと、勢子として働きに出ることが生活の一部になっていた。

今後の課題は、「オランダ観音さま」などの民話や野馬土手を地元の人に知ってもらうことだ。私自身、研究をするまで民話や野馬土手の存在を全く知らなかった。まずは、家族など周りの人に伝えていくことから始めたい。また、伝承すべき歴史的遺産は後世に残し伝えていくために保護されることが多い。しかし、遺産そのものを活用し、歴史を肌で感じる機会を作ることでもあると思う。次の機会には、流山市内の正確な野馬土手マップや野馬土手と直接触れることができるような場所を作りたい。



オランダ観音



現存している野馬土手（松ヶ丘の土手）

北条実時とウナギ井戸伝説

神奈川・鎌倉女子大学高等部 2年
田中 美衣

応募の動機

夏休みの課題としておこない応募しました。北条実時とウナギ井戸伝説を選んだ訳は、近所に北条実時と関係のあるお寺が存在し、北条実時とは一体どんな人物なのか、何をしたのか、気になったので調べてみることにしました。ウナギ井戸伝説は、北条実時について調べていくに連れてその伝説の存在が露わになったので、内容は勿論どんな話なのかも全く知らなかったので興味が湧き、その伝説も調べました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

北条実時は金沢文庫を創建し、六浦荘金沢に在住しました。過去に実時が読んでいた政治・法制・軍学などの蔵書たちが、鎌倉から金沢の居館に移されたことが、金沢文庫誕生の基礎となりました。実時を調べていくうちに私は、ある伝説に出会いました。その伝説の名前は「ウナギ井戸伝説」です。

北条実時が六浦の別荘に来ていた時、風邪をひきました。熱が高く、幾月経っても全く良くなりませんでした。ある夜、実時の夢枕に紀伊国（現：和歌山県）那智山の青岸渡寺の御本尊如意輪観音が現れました。如意輪観音は実時に対してこう言いました。「汝の病気はこれより西北に、那智山というところあり。そこにウナギ井戸という井戸がある。この井戸の水を飲めば、汝の病気は直ちに全快する。」というお告げを聞きました。実時が家来を調べさせると、釜利谷に有名な井戸があることが分かり、家来にその水を汲んでくるように告げました。家来がその井戸を見つけて中を覗くと、大きなウナギが井戸の底にいました。家来はそのウナギの住む井戸の水を持って帰り、実時に飲ませたところ不思議にも熱が下がり、元気を取り戻したそうです。それからというもの、この井戸を如意輪井戸、もしくはウナギ井戸と呼ばれるようになりました。

私はこの伝説にまつわる書物を読んで、疑問に思うところがありました。

疑問① 釜利谷に那智山や能満寺は存在していたか、如意輪観音を祀っていたのか。

答え① 那智山は存在し、能満寺もあった。しかし、如意輪観音は祀っていなかった。那智山は文政期には、夏山という地名に変わっていた。また、本尊は虚空蔵菩薩なので如意輪観音は祀っていないことが分かった。

疑問② 笹下、釜利谷、どちらが本物のウナギ井戸か。

答え② 両井戸にもウナギ井戸と呼べる要素があるので、どちらが本物のウナギ井戸か一概には言えない。「鰻の井の縁起」によると、「是地より西北の間に当たり二里余りの里に腐れ井あり」とあるので、是地は金沢の館なので多分称名寺から計算することになり、笹下とも、釜利谷とも書いてないので、不明という結論に至った。

私は今まで、こんなに時間をかけて調べたことがなくて、ここまで調べられた事にとっても驚いています。実時が創建した称名寺は、廃寺の危機にまで追い込まれましたが、人々の支えで復興が可能になり、現存する寺院になりました。あの時、人々の支えがなかったら、きっと称名寺は私たちに知られることなく消えていったことでしょう。

ウナギ井戸や釜利谷の那智山と能満寺について調査した時はまつわる書物が無く、レポートが進まない日もありました。図書館に通い、質問し、区役所に問い合わせし、求めている答えにたどり着けたとき、達成感に満たされました。本当に諦めないで良かったと思いました。

今後の課題として、あまりにもマニアックな伝説だった為、あまり知っている人がいなかった。ウナギ井戸伝説を沢山の人に伝えていきたいです。



鰻井戸 1



鰻井戸 2



北条実時の墓

義経伝説と白旗神社

神奈川・鎌倉女子大学高等部 2年
中野亜美

応募の動機

夏休みの課題としておこない応募した。私は毎年夏になると友達と白旗まつりに行っている。たくさんの屋台と地元の人が集まる大きなお祭りである。中学校の授業で「源義経に関わるすごい神社」ということを知り、源義経と白旗神社には親近感を持っていたが、今回、源義経と白旗神社と関わりについて調べることにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

藤原秀衡の庇護を受けた源義経は、秀衡が生きている間は安泰であった。しかし、秀衡の死後、息子の泰衡は父ほどの器量を持った人物ではなく、それを見抜いた義経の兄：源頼朝は泰衡に圧力を加えていった。頼朝の圧力に抗しきれなくなった泰衡は、ついに文治5年（1189）閏4月30日、義経を襲撃した。これによって義経は衣川の高館で自害し、31歳という若さでその波乱の生涯を終えたといわれている。泰衡の使者が、義経の首を持参して鎌倉の腰越に到着したのは、義経が自害してから既にか月半近くが経過した6月13日のことであった。義経の首は、本来、頼朝によって検分されても良いはずのものであった。しかし、頼朝は腰越には出向かなかった。『吾妻鏡』には、その後、義経の首に関する記述はない。頼朝が後日、義経の首と対面することもなかったのである。頼朝は鶴岡八幡宮が祀られている鎌倉の地に「穢れ」を持ち込まないため、首実検によって死の「穢れ」に触れることを極力避けたのではないかと考えられている。腰越の浜に捨てられた義経の首は、しばらくして境川を遡り、金色の亀の背中に乗って、白旗川に流れ着いたと伝えられる。

白旗神社がいつ頃できたのかは定かではないが、建久9年（1198）に、相模の一の宮寒川神社の分霊寒川比古命の来臨を請うたのが始まりと伝えられている。その後、宝法3年（1249）に、奥州平泉で自害した源義経を神社に祭ってある神様に加えられた。

「白旗神社」は、義経の怨霊に苦しめられた頼朝は藤沢奉行の藤沢次郎清親に命じて、首塚から一町ほど北にある亀の小山に社を建てて、義経の霊を祀らせたと伝えられている。

首洗井戸から東方向に450m程行った所には境川が流れており、境川は、義経の首実検行われた腰越の海に注いでいる。首実検の後、片瀬海岸に捨てられた首が上げ潮に乗って首洗井戸近辺に流れ着いたという伝承は、このような土地の状況と符号しており、そのようなこともあるのかと思われる。一般に、白旗神社といえば頼朝を祀る神社であるが、ここは義経を祀っているという大変珍しいケースである。

今回、もっと知りたいと思っていた義経伝説とそれにかかわる白旗神社について調べ、まとめることが出来て満足している。実際に調べてみると、なぜ義経が頼朝と仲が良くなかったのか、義経伝説の始まり、その後どうなったかを義経伝説と白旗神社の関わりをテーマにして深く知ることができた。

今までは友達に誘われて行っていた白旗まつりだが、これからは白旗神社のことを今までより知ったうえで行くことになる、また違った視点で祭りを楽しめることができるのではと思っている。



義経の銅像



鎮霊碑と本殿



首洗い井戸

地域民話研究部門選評

國學院大學教授 花部 英雄

■総評

今年の「地域民話研究部門」の応募作品を読みながら、内容に手ごたえを感じるものと、相変わらずネット頼みの拙い作品にガッカリするものがある。量的には圧倒的に後者であるのが情けない。自発的に作ったものと、別の目的で作ったものを応募するという安易なものとの違いということになるだろう。常に質的向上を目ざすものというコンテストでありたい。

ところで、前回の講評でも触れたことであるが、「地域民話研究部門」における民話の内容と研究について、今一度おさらいしておきたい。新たに応募してくれる人のための参考になることと、入賞できなかった方の見直す材料に生かしてもらいたいからである。

民話とは、庶民が日常世界の中で、現実とは異なる世界に遊び、休息と安寧を与えてくれる芸術的な世界のものといえる。一日の労苦を和らげ、明日への希望や力を与えてくれるものとして、具体的には「昔話」「伝説」「世間話」を指している。「昔話」は「むかしあるところに」で始まり、「めでたしめでたし」で終わる様式性のある物語的な内容で、これに笑話も含まれる。「伝説」は、神仏や巨人などの出来事や、義経など過去の人物の事件、また、山や岩、池沼など自然物に関わる説明的な話が多い。「世間話」は、日常の事件や人の噂の他に、天変地異や死後・異界・妖怪などの非現実な話などである。それぞれに特有の性質を持ち、その用途や機能および目的にも違いがある。

さて、その民話をどのように研究するかであるが、大きく二つの視点がある。一つは民話そのものの研究と、もう一つはその民話の活用という点である。前者の民話研究とは、地域における民話の特徴を明らかにすることであり、その民話がどのように誕生、成長し、また他と比べてどのような地域的特性を持っているかなどを調べることである。

もう一つの民話の活用については、歴史的に伝えられてきた民話を遺産や資源として、その価値を今後に向けて生かしていくという問題である。地域の過去の

歴史である民話を、未来に向けてどのように発信、活用していくかの試みといえる。地域の民話を眠らせておくのではなく地域の発展とともに活性化させいくことは、民話のこれからの大切な役割といえる。こうした趣旨を理解した上での作品作りを提唱したい。

ところで、念のため今年度の審査基準、および評価のポイントを示しておく。審査は次の基準で行なっている。第一に、民話の採集地や伝承地を訪ね、民話のある地域環境や生活上の意味を理解するなどのフィールドワークを行なっているかどうかである。第二に、そのために必要な文献や資料などを精査し盛り込んでいるかということ。第三に、そのようにして得た材料を十分に分析、考察した結果を、自分の言葉で適切にまとめられているかということである。その観点から客観的に行った審査の結果を、以下に報告する。

■団体の部

最優秀賞

「こんなあったけん調べてみた!! 一久谷地区・砥部町の伝承たち」

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

「初めに」で本研究を「地域の活性化」のための広報を意図したものと、その目的を明らかにしているのは、現在の地域の閉塞状況を高校生なりに心痛めている証拠と受け止めた。その目的を成し遂げるために、三つの伝説を調べ、その中の一つ「衛門三郎伝説」を紙芝居に仕立てて実演し、そのアンケートをとるなど、用意周到な計画で進められている。伝説地でのフィールドワークに加え、そつなくインタビューをこなした成果が、ここに収録されている。地域の疲弊を真剣に考え、それを作品化することで地域の活性につなげようとする発想は、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの趣旨に叶うもので、最優秀賞にふさわしい作品である。

優秀賞

『今昔物語集』巻三十第十の意識的欠字部分について
～舞台は古代下野国塩谷郡だった～

栃木県立矢板東高等学校

リベラルアーツ同好会

この研究は国文学的視点による伝説研究であり、高校生の水準を越えているものとして評価される。研究の中心は、今昔物語集の記述から意図的に消されたと思われる「欠字」が、現在のどの地域に相当するのかを、歴史学や民俗学研究の知見を援用しながらの研究である。馬頭観音などをキーワードに、地域の歴史的文脈から問題を追究したもので、説得力のある論旨の展開である。豊富な写真や図表等を用いた丁寧な構成は申し分ない。最後の「結論」部分で、今後の課題が上げられているが、なぜ欠字にされたのかについても課題に加えて欲しい。どのような政治力学（？）が働いたのかも含めて、今後の研究に注目したい。

優秀賞

「謝文旦」は実在したのか～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～

鹿児島県立鶴翔高等学校

地域文化研究同好会

この研究は、ボンタン（文旦）という果実に込められた地域の歴史事情を解明するための意欲的な追究といえる。16Cの東アジア世界における交易の際に漂着した謝文旦という人物をめぐる民話を、歴史的事実として検証するために、さまざまな資料や関係者への聞き書き、現地調査などを精力的に行なった結果である。結論は「謝文旦」は実在しなかったということであるが、しかし、それよりも郷土の阿久根という地を新たに見直すことになったのは、代えがたい成果といえる。地道で真摯な研究は、研究そのものだけでなく、新たな価値を生み出すものであることを教えてくれる。

佳作

「昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察」

静岡県立荊山高等学校

課題研究班

この気宇壮大なタイトルには、少々驚かされた。従来の昔話研究にかかわる研究者には、昔話から地域の「人々の精神構造」を明らかにしようとする発想は浮かばない。しかし、この研究はポイントを押さえて伝承資料を丹念に読み解き、比較の方法を用いて地域的特性を、地名や歴史事項、地理的自然的な環境を組み込みながら傍証していくという方法では一貫している。ただ、残念ながらその研究結果の成否は評者には判断できない。微妙な問題でもあり、ぜひこの研究者の中から、一人でも研究を継続し、いっそうの説得力ある論文へと完成させてほしい。

佳作

「MINWA ～山梨の民話と民話でつながる世界～」

山梨県立甲府第一高等学校

探求2班

昔話は「一民族的な現象ではなく、超民族的な事実である」と、昔話研究者の関敬吾氏は述べた。この前提に従えば、「山梨の民話」という民話はあるのかということになるが、問題を複雑にならないようにするために、民話＝昔話ととらえ、伝説を民話と区別することにしよう。しかし、そんな杞憂はともかく、この研究グループはそうした常識にとらわれず、山梨の民話をジャンルや民話数、内容等から比較分析して大胆に結論づける。細かな反論はあるとしても、こうした先取に富んだ斬新な発想にもとづく研究は歓迎したい。これまでの常識にとらわれない活力は新たな発見を生み出す原動力となるのだからである。

■個人の部

最優秀賞

「日本人と「桜」の伝説について」

愛媛県・済美平成中等教育学校

砂野 光咲

本作品の「目次」を見て、この研究が多様な視点からの緻密な方法によるもので、研究者の桜への並々な

らぬ執着ぶりを感じた。まずは学術用語の検討から出発し、問題の「大宝寺うば桜」を解説し、愛媛県の桜の今昔、日本人と桜、文芸の桜、そして最後には柳田國男の「花咲爺」の桜といった構成には驚かされる。桜を多面的にとらえる態度は、「桜狂い」で有名な中世の西行に勝るとも劣らない。桜を調べることで、日本人の先祖の思考や感性と「つながる」ことを意図していたという感想はよくわかる。華やかな桜を地道に地味なまでに研究する努力に喝采を送りたい。最後に、桜の小説に坂口安吾の「桜の満開の下」も加えて欲しかった。

優秀賞

「河童の甕」

東京都立国際高等学校

井上 万結

この作品は、旅先での爽やかな出会いによる調査報告のレポートである。民俗学という学問は、その当初から調査旅行にもとづいた経歴がある。この報告者は質のよい旅行から、この研究を深めている。伊豆の寺にあった「河童の甕」が、旅行者の目と関心を引いた。レポートは、この甕を所蔵する栖足寺^{せいそくじ}の展示品を手際よく丁寧に紹介する。さらには、お寺の住職が収集した品々を多くの人に発信していることに共感し、この「河童の甕」を通して、さらに多くの人々と「つながる」ことを願うといった優しい心が文章から伝わってくる。

優秀賞

「オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～」

千葉県・流通経済大学付属柏高等学校

坂入 茉緒

この研究は、流山市のオランダ観音をめぐる物語である。オランダ葦毛馬を殺したと伝える伝説を、病死ではないかととらえ、その真偽をたどる研究の旅に出る。オランダ馬、小金牧^{こがねまき}という牧場や、そこに従事する牧士^{もくし}、野馬土手^{のまどて}など関連する歴史用語の解釈は確か

である。現在の地域環境から、かつての牧場を再現する手堅いフィールド調査研究である。そこから福島「相馬の野馬追い」へと考察の範囲を広げていく。ただ、結論がいくぶんあいまいな印象を受けた。問題は「オランダ馬」なのか、「小金牧」なのか、いくぶんテーマが拡散した嫌いがある。

佳作

「北条実時とウナギ井戸伝説」

神奈川県・鎌倉女子大学高等部

田中 美衣

北条氏初代の武将の地位にあった北条実時の「ウナギ井戸伝説」は、一般に広く知られているとは言えない。その点ではマニアックな印象はあるが、それを追究するために北条実時と金沢文庫、称名寺から始まり、伝説の内容を深く掘り下げる。その伝説内容を地形や絵、写真など用いてビジュアルに訴えるなど、わかりやすく図解を心がけたのがいい。しかし、北条実時の歴史記録等に出てこない伝説が、インパクトのある民話風な内容で、後世に伝えられていることは、伝説とは何かといった問題提起をはらんでいるように受け止められる。

佳作

「義経伝説と白旗神社」

神奈川県・鎌倉女子大学高等部

中野 亜美

本研究は、義経が平泉で自害した首の検証（「首実検」）にあたって、首が保管されたとされる白旗神社の「首洗い井戸」をめぐる調査研究である。首洗い井戸や白旗神社の現在から、往時の状況を歴史的にたどり明らかにすることを目指す。ただ、史料の提示が少なく、いくぶん現在の地域環境の概説的な紹介にとどまり、深みに欠けた印象がある。ぜひとも、首が鎌倉に來たことを明らかにする歴史史料を究めて欲しい。こうした伝説研究には、史料（資料）の収集とその精緻な読みが必須要件であることを確認したい。

学校活動部門選評

國學院大學教授 高橋 大助

この部門では、応募に際して2点の条件が示されています。ひとつは、それが「学校活動」と言えるものであること、もうひとつは、地域の伝承文化をテーマにした学びであることです。この二つの条件をクリアしていることが、前提であり、また評価の規準となります。

審査をしていて、いつも、困惑するのは、「学校活動」という点では、大変高い評価をしたくなる作品でありながら、その活動が、伝承文化に学んでいる、とはいえないものにしばしば会うことです。今回も、高校生による国際交流として敬意を表したいものや、地域貢献という点ではもはや質の高い社会活動の域にあるものなど、学校活動という観点からは、入選作より高いレベルにあるものはいくつかありました。しかし、地域の伝承文化に学ぶ、というテーマを満たしてはいないために選ぶことはできませんでした。入選作は地域で伝承されてきた神楽を現代に活かし直そうという試みで興味深いのですが、そこから何を学んだのか、それが今ひとつ伝わらず、佳作以上の評価をすることはできませんでした。

この部門としては、クラブ等の課外活動としてより、学校全体の活動として、教科を横断した総合の時間などを使って地域の伝承文化に学ぶような取り組みや、伝承文化の学びに取り組むことで学校における教科教育のありようが変わる、そんな斬新な活動を期待するところがあるのです。例えば、高等学校国語に新設される「言語文化」の教材として、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる、と学習指導要領には書かれています。「言語文化」という科目の目標を、伝承文化の学びを以て満たす、というようなことも、工夫次第で可能なのかもしれません。

学校活動部門選評

國學院大學准教授 飯倉 義之

今年度の「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」学校活動部門においては、残念ながら応募作から優秀賞・佳作の選出が適わず、宇部フロンティア大学付属香川高等学校「宇部 伝統芸能文化復興プロジェクト～岩戸神楽舞復興に挑む～」を入選として評価するに留まらざるを得ませんでした。といっても、応募9作品の探求または実践としての水準が低いわけでは決してありませんでした。いずれも意欲的に対象を発掘して探求したり、新たな物品の開発を実践したり、地域、そして全世界に向けての発信を試みたりと、いずれも高校生の活動として意義深く、評価できるものでした。しかし、本コンテストは「地域の伝承文化に学ぶ」であり、その趣旨に添った活動でありつつ「研究」ではない、実践的な「活動」を評価するというのが本部門の評価基準です。

いくつかの応募作は地域の伝承や歴史、ことばを掘り起こし、しっかりと探求していましたが、実践や発信に欠けると判断せざるを得ませんでした。別の応募作は、地域の伝承や特有の作物を取り上げて広く発信する実践に優れていましたが、対象となる伝承の掘り下げや考察が十分になされていませんでした。以上の観点から、本年度は優秀賞・佳作該当作なしと判断せざるを得ませんでした。極端なことを言えば、本コンテストの別部門や、他のコンテストに応募してくれたら十分に入賞するだろうと思う作品もありました。審査員として、皆さんの努力を賞することができないのが残念でなりません。応募してくれる皆さんの頑張りに報いられるよう、学校活動部門の求める作品像を明確に提示する必要を痛感しました。

入選となりました宇部フロンティア大学付属香川高等学校「宇部 伝統芸能文化復興プロジェクト～岩戸神楽舞復興に挑む～」は其中で、岩戸神楽舞の掘り起こしと、webを用いた世界への発信の実践を評価しました。岩戸神楽舞という民俗芸能それ自身の来歴や所作・伴奏・衣装などについてより深く探求し、生徒の皆さんも舞を習得するなどの実践的な参加があれば、より高く評価できたと考えます。

本部門の最終審査結果にかかわらず、応募してくれた皆さんの活動は貴重なものでした。学校単位の活動を、ぜひとも継続してください。

第15回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 受賞者一覧

地域文化研究部門【団体】

賞名	高校名	グループ名	作品名
最優秀賞	岐阜県立益田清風高等学校	地域研究	イチイからたどる「飛騨のなりたち」- 飛騨の伝承文化に学ぶ -
優秀賞	静岡県立沼津城北高等学校	情報メディア部 用水班	知られざる深良用水の恩恵 ～深良用水の恩恵は深良（裾野市）だけではなかった。～
優秀賞	東京都・香蘭女学校高等科	出雲研修	出雲の神話が語ること
佳作	愛知県立杏和高等学校	歴史研究グループ	幻の甚目寺飛行場 ～戦後74年目証言を聴く～
佳作	鳥取県立八頭高等学校	因幡のカサ踊り研究会	因幡の手笠踊りについて
入選	静岡県立沼津城北高等学校	こうじ研究チーム	清水町から世界へ ～こうじの謎に迫る～
入選	愛知県立杏和高等学校	チーム観音	矢合観音と水 現代に続く民間信仰 ～植木商人はインフルエンサーか～

地域文化研究部門【個人】

賞名	高校名	応募者名	作品名
最優秀賞	鹿児島県立屋久島高等学校	3年生 中島 渚	民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響
優秀賞	東京都・東洋高等学校	3年生 八木 つきの	高田富士考 - 新宿区のともしび 地域性を追いかけて -
優秀賞	岐阜県立益田清風高等学校	2年生 田口 真江	白雲座の地歌舞伎 ～地域の伝承文化を学び、受け継ぐ～
佳作	愛知県立杏和高等学校	3年生 熊沢 咲良	地域行事の継承の問題とこれから ～屯倉村祭囃子の研究から創る地域の未来～
佳作	福岡県立修猷館高等学校	3年生 谷口 生貴斗	集落の調査 - 福岡県糸島市王丸集落 -
入選	愛知県立杏和高等学校	3年生 木村 心優	木遣り音頭研究序説 ～歌声をたよりに～
入選	鳥取県・米子北斗高等学校	2年生 森 拓斗	新たな時代の「伝統文化」のカチとは？- 3点の伝統文化の現状からみる、「人」、「技術」、「心」のすがた -

地域民話研究部門【団体】

賞名	高校名	グループ名	作品名
最優秀賞	愛媛県立東温高等学校	郷土芸能部	「こんなあったけん調べてみた!! - 久谷地区・砥部町の伝承たち -」
優秀賞	栃木県立矢板東高等学校	リベラルアーツ同好会	『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分について ～舞台は古代下野国塩谷郡だった～
優秀賞	鹿児島県立鶴翔高等学校	地域文化研究同好会	「謝文旦」は実在したのか～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～
佳作	静岡県立隼山高等学校	課題研究班	昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察
佳作	山梨県立甲府第一高等学校	探求2班	MINWA ～山梨の民話と民話でつながる世界～
入選	愛媛県立西条高等学校	地域・歴史研究部	続「おたちきさん」～伝承の謎に迫る～
入選	群馬県・高崎商科大学附属高等学校	文芸部	南総里見八犬伝 ～群馬の里見家と大河ドラマ実現について～

地域民話研究部門【個人】

賞名	高校名	応募者名	作品名
最優秀賞	愛媛県・済美平成中等教育学校	4年生 砂野 光咲	日本人と「桜」の伝説について
優秀賞	東京都立国際高等学校	2年生 井上 万結	河童の甕
優秀賞	千葉県・流通経済大学付属柏高等学校	2年生 坂入 茉緒	オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～
佳作	神奈川県・鎌倉女子大学高等部	2年生 田中美衣	北条実時とウナギ井戸伝説
佳作	神奈川県・鎌倉女子大学高等部	2年生 中野 亜美	義経伝説と白旗神社

学校活動部門

賞名	高校名	応募者名	作品名
入選	山口県・宇部フロンティア大学付属香川高等学校	1年生 重村 優羽	宇部 伝統芸能文化復興プロジェクト ～岩戸神楽舞復興に挑む～

折口信夫賞

高校名	応募者名	作品名
鹿児島県立屋久島高等学校	3年生 中島 渚	民具を活用したレクリエーションが参加者に与える影響

後 記

第15回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、全国各地の高等学校から609作品のご応募をいただき、無事終了することができました。本誌で紹介した作品はもちろんのこと、応募作品の多くは高校生の皆さんが実際に現地に出向き調査をし、地域の方や専門家から話を聞き、研究を積み重ねて作成された内容の濃いものでした。

1つの課題を高校在学中の3年間をかけて調査している生徒さんも少なくありません。調査研究を開始するきっかけは様々ですが、興味・関心を持ち、知識を深め、地域とも繋がりながら探究しようと行動するのはなぜか。原動力は、伝承文化の重要性に気づき、未来に継承していきたい・していこうという気持ちの表れのようにも感じました。そこから学ぶこと感じることは、携わった人の数、得られた情報量などによって異なり、それによって達成感も違うと思います。そして、これらの体験が新たな興味や目標の発見へと繋がっていれば嬉しいです。今後多くの「伝承文化」に出会えることを楽しみにしております。

最後に、本コンテストにご応募いただいた高校生の皆さん、指導教諭ならびに地域の皆様、そしてご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

